

聖徒の道

5
1992



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1992年5月号



表紙——

1991年のモルモンタバナクル合唱団の公演旅行中、レニングラード(現サンクトペテルブルグ)で、合唱団員と談笑する十二使徒定員会会員のラッセル・M・ネルソン長老。ネルソン長老は、過去5年間に中部および東ヨーロッパで起こった驚くべき出来事の数々を紹介している。(本誌「ヨーロッパに展開するドラマ」p.8参照。写真撮影クレッグ・ダイヤモンド)

こどものページ表紙——

ゆううつな冬に代わって、春がやって来ました。このきせつになると、北半きゆうは美しい自ぜんにつつまれます。さいたばかりの花に囲まれて、3人のかわいい女の子がその美しさを楽しんでいます。すくい主はすべての人にふっかつをやくそくされました。春はこのやくそくをしょうちょうしています。(「エマオへの道」本誌子供のページp.6参照。写真撮影マイケル・マッコンキー)

一般

大管長会メッセージ——天の家、永遠の家族

第二副管長トーマス・S・モンソン 2

ヨーロッパに展開するドラマ

ラッセル・M・ネルソン長老 8

ウイスイット・カナカーン デビッド・ミッチェル 32

世界を駆ける家族 40

チェコスロバキアへの帰国 ロスティアーア・ゴードンスミス 46

右の車線へ ビクター・ミゲル・ボッタリ 48

青少年

安息日になった日曜日 クライティアー・クリーガー 25

質疑応答——なぜ伝道に出ることはそれほど大事なのですか 28

「これらの最も小さい者のひとりに…」

キャロリン・セッションズ・アレン 36

定期特別記事

読者からの便り 1

家庭訪問メッセージ——

個性豊かな姉妹たちのきずな 24

こども

ファウリー・ウェンディー・トリース・レイジェス

コーリス・クレイトン 2

おもちゃばこ 5

分かち合いの時間——エマオへの道

バージニア・ピアス 6

神せいなせきにな

第一副管長ゴードン・B・ヒンクレアー 8

2回目のめんせつ ロバート・マクドナルド 10

ロレンゾ・スノー ケリー・リックス 14

ちいさなみんなのために——せいさん会のエチケット

ジュリー・H・ジェンセン 16

聖徒の道

1992年5月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシントン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、チャールズ・ティディエ、ロバート・E・ウエルズ
編集長：レックス・D・ピネガー
教材課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐／子どものページ：ティエーン・ウォーカー

チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ
アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステイブ・テイトン、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

工程管理：ダイアナ・バンスタブレン

配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1992年5月号第36巻第5号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106 東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通号150円、大会号350円

International Magazine MAY 1992
ITEM 92985 300

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1992 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Translated into Japanese 1992.

●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351 (代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year, \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

読者からの便り

慰めをもたらす

「シュテルン」(ドイツ語版。「星」の意味)1991年2月号の「あなたはむさぼってはならない」というゴードン・B・ヒンクレー副管長のメッセージにとっても感謝しています。

いくら菓を飲んでも効かないときでも、神様のみ言葉によって癒されることがあります。私は健康上の理由で職場から解雇されており、家賃や食費にも不自由していました。学校に行き、友人たちのようにいろいろなことをしてみたのですが、通りの向こう側にある食料品店にも行けないほど具合が悪いこともたびたびありました。

そんなある日、「シュテルン」がいつもよりも早く届きました。それまで私は、健康と天父への信仰をもっと持てるようにと祈り求めています。「あなたはむさぼってはならない」というメッセージは私に力を与えてくれました。そして、私は自分でできる限りのことをしているのだと思うことができました。

ドイツ
福音を信じるある姉妹より

救い主の愛

このような素晴らしい機関誌があることを心から喜んでます。いつも「リアホナ」(スペイン語版)を楽しく読んでいます。教会幹部やほかの教会員の方々のメッセージや勧告は、私が必要とする霊的な強さを与えてくれます。これらの大切なメッセージを読むと神様が霊の子供たちに対して抱いておられる愛が伝わってきます。

すべての人にこの機関誌とモルモン経を読んでもらいたいと願っています。なぜなら私たちが永遠の生命を得、この地上での務めをよく果たす助けとなるように、これらの書物はあるからです。

ペルー
レオンシオ・ルパイ

最高のプレゼント

私たち家族は「リアホナ」(ポルトガル語版)があることにとても幸せを感じています。特に、大会報告号はすばらしいと思います。このような内容豊かな機関誌を友人たちにクリスマスプレゼントとして贈ることができて、非常にうれしく思います。私たちは町で有名な裁判官に「リアホナ」を差しあげました。その方はとても誠実な人柄で、優秀な裁判官であると同時に立派な父親でもあります。彼は毎月、「リアホナ」を聖典と照らし合わせて入念に研究し、裁判官として指令や判決を下すときに靈感を受けられるようにと備えています。

近いうちに宣教師と一緒に訪問し、福音のメッセージを分かち合いたいと思っています。ブラジル、フロリアナポリスステーク部クリスウィーマ支部
レモール家族

差し伸べられたみ手

私は1991年2月にバプテスマを受けました。そのすぐ後で、「シュテルン」1991年1月号を手に入れました。死者のバプテスマに関する記事を読み、神殿に参入できるようになったら、すぐに母の身代わりのバプテスマを受けようと決心しました。その後のことですが、母が私のまくら元に現われて、「私はバプテスマを受ける準備はできているよ」と言ってくれました。

この素晴らしい経験をさせてくださった天父とそのメッセージを伝えてくれた「シュテルン」に永遠に感謝します。

ドイツ、ノイミュンスターステーク部
グルックシュタットワード部
エリカ・ギーゼン



天の家、 永遠の家族

第二副管長
トーマス・S・モンソン

「家」庭は正しい生活の基であり、その大切な働きに取って代われるものはほかに何もない。」(大管長会、1962年)私たちは歌や話などを通してたびたびこのことを思い起こします。

事実、家庭とは家以上のものです。家は、材木、れんが、石などで作られますが、家庭を築きあげるのは、愛、犠牲、互いへの尊敬の念です。家族を養護する家は家庭となり、家庭は天国ともなり得ます。家族の住む建物に違いがあるように、家族には大家族もあれば、小さな家族もあります。年齢構成の高い家族もあれば、若い家族もあります。良い状態の家族もあれば、疲労、怠惰、墮落の徴候が見える家族もあります。

末日聖徒の家庭には、父親、母親、息子、娘が皆そろっている家庭もあれば、ひとりまたひとりといった具合に、家族との悲しい別離を繰り返している家庭もあります。ときには、取り残されてひとりだけになってしまった家庭もあります。しかし家庭は永遠のものであり、決して絶えることはありません。

ひざまずいて祈り、
また進んで奉仕の業を行ない、
道を踏みはずした人々に
手を差し伸べてください。
これらはすべて、
私たちの家庭を天国とするために、
神が準備してくださった設計図の
重要な図面を成しています。

「汝ら組織して……
祈りの家、断食の家、
信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、
神の家なる一つの家を建つべし。」(教義と聖約88：119)

自分の家庭を築く準備をしている人、また現在の家庭をもっと天国に近いものにしようと考えている人も含めて、私たちは皆主に学ぶことができます。主は偉大な設計士であり、これまでも私たちにどのように家を建てたらよいかを教えてくださいました。

今私たちが畏敬の念を込めて聖地と呼ぶ地域の村や町のほこりにまみれた道を歩いたり、ガリラヤ湖のほとりで弟子たちに教えを説いたりされたときに、主はたとえ話や人々がよく知っている言葉を用いて話されました。特に家の建築と話を聞いている人々の生活を関連づけて話をされたことは、何度もあります。

「おおよそ、……内わで分れ争う町や家は立ち行かない。」(マタイ12：25)後の時代にも次のような警告をしておられます。「見よ、わが家は秩序の家にして混乱の家にあらず……。」(教義と聖約132：8)

1832年12月27日、オハイオ州カートランドで、主は予言者ジョセフ・スミスに与えられた啓示を通して、こう勧告しておられます。「汝ら組織して必要なる物をことごとく調べよ。而して、祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、神の家なる一つの家を建つべし。」(教義と聖約88：119)

賢明で間違いのない家造りをするための設計図として、これ以上に確かなものをほかに見つけることができるでしょうか。このような家であれば、マタイの記録の中に書かれている「岩の上」に建てられた家に必要とされる事柄を満たせるでしょう。(マタイ7：24-25参照)このような家は、問題の多い現代の世の中ではごく当たり前になっている苦難の雨、敵意の洪水、疑いの風に遭遇しても、決して倒れることはありません。

しかし、中にはこう言う人がいるかもしれません。「この啓示は神殿の建設について与えられたものですが、今日でも通用するのでしょうか。」

そのような人にはパウロの言葉をもって答えたいと思います。彼はこう宣言しています。「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。」(Iコリント3：16)

家庭を築くうえで、主を家族の導き手としましょう。そうすれば私たち一人一人は、この建築計画全体の中で重要な役割を担うことができるでしょう。つまり私たち全員が家を建てる者となるのです。ここで家を建て始めるに当たって踏まえておくべき神の導き、人生の教訓、

問題となる事柄についていくつか考えてみたいと思います。

重点1. ひざまずき祈る

ダビデの子であり、イスラエルの王でもあった賢者ソロモンは次のように言っています。「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言3：5-6)

アメリカ大陸においても、ニューファイの弟ヤコブが次のように宣言しています。「心を堅く保って神を頼み、固く信じて神に祈れ。」(モルモン経ヤコブ3：1)

神から与えられたこの勧告は、乾ききった大地を潤す清水のように、現代の私たちの渇きを癒してくれます。私たちは実に多くの困難な問題を抱えた時代に生きているのです。世界中の病院は、肉体的な病気や心の病を抱えた人々であふれています。人々は自分で問題を解決することができず、離婚裁判所は多忙を極めています。また企業の人事担当者や苦情処理委員会などに持ち込まれる相談件数もかなりの数に上っています。

ある会社の人事部で小さな苦情の処理を担当している人がいます。彼は、解決のむずかしい問題を抱えた相談者のために、自分の机の上に冗談に小さなプレートを置きました。すると異常なまでに多忙を極めていた日々を終止符が打たれたのです。プレートにはこう書いてありました。「あなたは祈りましたか？」この人事担当者は、プレートを机の上に置いたときには気づきませんでした。この言葉によって、問題解決、苦しみの軽減、過ちの防止、また人の心に安らぎと喜びをもたらすという点において、ほかのいかなる方法にも勝る勧告と指導を与えていたのです。

合衆国のある著名な判事が、「犯罪や違法行為を減らし、家庭や国家全体に平和と喜びをもたらすために、私たちは一市民として何ができるでしょうか」という質問を受けたことがあります。彼はよくよく考えてからこう答えました。「昔ながらの家族の祈りに立ち返ることではないでしょうか。」

ひとつの民として私たちは、この教会では家族の祈りが時代遅れの習慣になっていないという事実に感謝しているのでしょうか。この世の中に、家族が共に祈りを捧げている光景以上に美しいものはありません。「共に祈る

家族はいつまでも離れることがない」というよく引用される格言の中には、確かに深い意味があります。

主は家族の祈りを捧げるように命じ、次のように言われました。「汝らの妻子が祝福を受くるよう、たえずわが名によりて家族の祈りを御父に捧げよ。」(IIIニーフアイ18:21)

ここで家族が共に祈りを捧げる典型的な末日聖徒の家庭をちょっとのぞいてみたいと思います。父親と母親、そして子供たちが皆ひざまずき、頭を垂れて、目を閉じています。そこには愛や一致、安らぎの精神が満ちあふれています。小さな子供が、父さんが正しい行ないをし、主の戒めに忠実であるようにと祈りました。かわいい息子のそのような祈りを聞いて、それにこたえたいと思わない父親がいるのでしょうか。やさしい母親が、娘が靈感によって伴侶となる人を選び、神殿結婚にふさわしい備えができるようにと祈りました。最愛の母親が謙遜にそう祈るのを聞いて、その意に添いたいと思わないような娘がいるのでしょうか。ふさわしい生活をし、いつか主の使いとして伝道に出ることができるようという両親や兄弟、姉妹の祈りを聞いた息子たちは、きっとよい宣教師になろうという強い望みを抱いた青年に成長していくことでしょう。

家族の祈り、個人の祈りをするとき、神への信頼と信仰が必要です。常に祈りなさいという勧告にあまりよく従っていない人は、今からすぐに祈りを始めるようにしてください。祈りは人間の弱さを示すものと考えている人がいるかもしれません。そのような人は、祈りを捧げるときにこそ人は最も強くなるということを心に銘記すべきです。

重点2. 自発的な奉仕

奉仕についても、主の生涯の中にその模範を見ることができます。地上で人々に導きと教えを施しておられたときの主は、まさしくまばゆいばかりに愛の光を放っておられました。主は、手足の不自由な人々を癒し、目の不自由な人々を見えるようにし、耳の不自由な人に聞く力を与え、死んだ人を生き返らせました。

主が語られたたとえ話には力があります。よきサマリヤ人のたとえ話の中で主は、「あなたの隣り人を愛せよ」と教えられました。姦淫の罪を犯して捕らえられた女性に対しては慈悲を示し、それにより、思いやりをもって

人を理解することを教えられました。またタラントのたとえ話の中では、自分を高め、完成に向けて努力するように教えておられます。主の教えに従えば、私たちは永遠の家庭を築く責任をもっとよく果たせるようになるはずで、人を高めようとする人は、ほかの人をあてにするようなことはしません。人に仕えようとする人は、不機嫌な思いを抱き続けたりはしません。

自発的な奉仕の模範は、現在の予言者エズラ・タブト・ベンソン大管長とその家族の中にも見いだすことができます。ベンソン大管長はご自分のお父さんが宣教師に召されたときのことを教会幹部に話されたことがあります。ベンソン大管長のお父さんは、妊娠中の奥さんと7人の子供、農場などすべてのものを後にして伝道に出たといっています。では、彼はそれで何かを失ったのでしょうか。ベンソン大管長の母親はよく子供たちを台所のテーブルの周りに集め、ゆらめくランプの光の中で夫からの手紙を読み聞かせました。あふれる涙をぬぐうために、手紙を読む声が何度も途切れしました。この結果はどのようなものだったのでしょうか。後に、子供たちは皆伝道に出ました。しかも皆、自発的に出たのです。

重点3. 道をそれた人々に援助の手を差し出す

人生を送っていくうちに、道をそれていく人々がいます。永遠の生命を示す道路標識を無視して別の道を選び、結局は袋小路に迷い込んでしまう人もいます。無関心、不注意、利己心、罪、これらはすべて、人々の生活に多大な損失を招くものです。何かの理由で誤った道に足を踏み入れ、気がついたときには悲しみと苦しみしか残らない生き方をしているという人がいます。

1985年の年末に、大管長会はキリストの群れから離れていった人々に関心を示し、「教会から遠のいている人々への呼びかけ」という特別なメッセージを出しました。その中にはこう書かれています。「私たちは教会員に対して、自分に罪を犯した人々を赦すように勧告します。また教会に活発でなくなり、ほかの人々に対して批判的になっている人々には、『立ち返りなさい。そして主が備えられたテーブルにつき、聖徒の交わりという甘く、心を満たしてくれる木の実を再び味わいなさい』と呼びかけるものです。

私たちは、戻りたいと望みながらも、きまり悪さを感じてそうできないでいる人々が多くいると確信していま

一晩で大人になった少年の姿がここにあります。

感情やプライドを抑えて

息子を救うために手を差し伸べた父親の姿がここにあります。

す。しかし、そのような人々に申しあげたいと思います。私たちは両手を広げて皆さんを歓迎し、喜んでお助けしたいと願っているのです。」(大管長会からの手紙1985年12月23日付)

次のようなよくある光景が、助けの手を差し伸べる個人的な機会を理解するのに、役立つかもしれません。ジャックと呼ばれる少年の家庭を見てみましょう。ジャックは幼いころから父親と口論が絶えませんでした。17歳になったある日、父親と特に激しいなじり合いがありました。「もう我慢できない。家を出て行ってやる。絶対に帰って来るもんか。」父親に向かって捨てぜりふを吐くと、自分の部屋に戻り荷物をかばんに詰め込みました。引き止める母親の言葉も怒り狂った彼の耳には入りません。涙にむせぶ母親を戸口に残して、ジャックは出て行きました。

庭を通過して門を出ようとしたときです。父親の呼ぶ声がしました。「ジャック、おまえが出て行くのは父さんが悪かったせいだよ。ほんとにすまなかった。おまえが帰って来たいと思ったら、いつでも帰って来ていいんだよ。そのことを忘れないでくれ。そうしたらもっといい父親になるようにするよ。いつでもおまえを愛していることを忘れないでくれ。」

ジャックは何も答えずに、そのままバス乗り場まで行きました。そして遠くの町まで行く切符を手に入れました。バスの座席に座ったまま長い間窓の外を眺めていると、父親の言葉が思い出されます。父親がしたことはよほどの愛がなければできないことだと彼は気づきました。父親は謝ったのです。戻って来るように哀願し、叫んだ父親の言葉は夏の気配の中に響いていました。「おまえを愛しているよ」と。

そのとき、ジャックは今度は自分がそれにこたえる番だと気づいたのです。自分の中に平安を取り戻す道は、父親が示してくれたと同じ成熟と善意、愛を、今度は自分が父親に示す以外にないと知りました。ジャックはバスを降り、家に戻る切符を買って、帰って行きました。

家に着いたのは真夜中過ぎでした。家の中に入り、明かりをつけると、揺りいすの中で父親が頭を垂れていました。父親は顔を上げてジャックを見ると、いすから立ち上がり、ふたりは走り寄って抱き合いました。ジャックはよく「家で過ごしたその後の何年かが、ぼくの一番幸せな時期でしたね」と言います。

一晩で大人になった少年の姿がここにあります。息子が、断絶した家族、崩壊した家庭に起因する大勢の「失われた人々」のひとりになる前に、感情やプライドを抑えて息子を救うために手を差し伸べた父親の姿がここにあります。愛は人を結びつけ、心の傷を癒します。愛はだれもが感じているのに、それを言葉で言い表わそうとする人はあまりにも少ないのです。

はるかなシナイ山から語られた、主の次の声が耳に響き渡るようです。「あなたの父と母を敬え。」(出エジプト20:12)後の時代になって、その同じ主はこう命じられました。「汝相愛して共にこの世に生きよ。」(教義と聖約42:45)

ひざまずいて祈り、また進んで奉仕の業を行ない、道を踏みはずした人々に手を差し伸べてください。これらはすべて、私たちの家庭を天国とするために、神が準備してくださった設計図の重要な図面を成しているものです。

確かな技術を身につけて、安易な方法は避け、主の設計図に従って家庭を築きあげようではありませんか。そうすれば、建物の出来具合もご覧になる主は、いにしえの時代に神殿を建てたソロモンに言われたと同じように、私たちにこう言ってくださることでしょう。「わたしはあなたが建てたこの宮を聖別して、わたしの名を永久にそこに置く。わたしの目と、わたしの心は常にそこにあるであろう。」(列王上9:3)こうして私たちは天国のような家庭と永遠の家族を持つことができるようになるのです。□

ホームティーチャーへの提案

1. 主は私たちに、堅固で幸福な家庭を築く設計図を与えてくださった。

2. そのためには以下のような3つの指針がある。

- ひざまずき祈る。祈りは問題を解決する助けとなり、苦しみを軽減し、過ちを防ぐ。また、ほかの方法では得ることのできないすばらしい幸福をもたらす。
- 自発的な奉仕。人を高めようとする人々は、ほかの人をあてにすることはない。また、人に仕えようとする人は、不機嫌な思いを抱き続けたりしない。
- 道をそれた人々に手を差し伸べる。愛は人を結びつけ、心の傷を癒す。



ヨーロッパに展開するドラマ

十二使徒定員会会員
ラッセル・M・ネルソン

中部、および東ヨーロッパで教会を取り巻く環境のここ5年ほどの変化には、目をみはるものがあります。私は、その数々の出来事について個人的な見地から概要を紹介するよう依頼を受けました。この地域は、近年、世界中の人々の耳目を集める数々の事件の舞台となった所です。そのドラマに目を向ける前に、まず導入の意味で基本となる概念をいくつか整理しておきたいと思います。

●十二使徒評議員会の一構成員にすぎない私のこの記事は、この地域や世界のほかの国々で果たしてきた同じ十二使徒の皆さんの働きを、すべて網羅するものではありません。大管長会と十二使徒の方々全員がヨーロッパの地——イギリスとアイルランドから東ヨーロッパの国々まで——で、この時期に何らかの働きをしてきました。こうした集中的な努力の結果、この大陸は計り知れない祝福を受けてきました。これら幹部の方々もまた、天の指示に聞き従い、国々の門戸を開き、国土を奉獻すると同時に、教会を設立し、諸事を整えてきたのです。彼らは召しを「全力を尽して遂行」し、高い模範を示して、私のみならず彼らに従う大勢の人々に影響を与えてきました。

●使徒としての責任は、ひとつの大陸やその住民に限定されるものではありません。十二使徒は地球上のすべての国々の民を教え導くよう召されています。(マタイ28：16-19；マルコ16：14-15；ルカ24：47-48；ヨハネ21：15-17；黙示14：6；モーサヤ3：13；アルマ29：8；教義と聖約42：58；107：33；134：12参照)

●十二使徒は「他の者を呼ぶことをせず」(教義と聖約107：38)、七十人の助けを要請することになっています。靈感によって定められた組織形態に従い、七十人は地域会長会として召され、伝道部長や地元の指導者たちに指示を与えます。

●十二使徒は大管長会から委任を受けて、その責任を果たします。十二使徒はその委任を受けることにより、聖典にある偉大な約束にあずかる資格を得るのです。「十二使徒会〔は大管長会により〕如何なる所へ遣わさるるとも、わが王国の門戸をどの国民にも開く権能を有つ。」

(教義と聖約112：21)

主は「われその時期に於けるわが業を急ぐべし」(教義と聖約88：73)と言われました。最近の末日聖徒イエス・キリスト教会の発展を目にする人は皆、その速度が増していることをはっきり感じ取っているのではないのでしょうか。このみ業を押し進められる全能の主のみ手に対して、謙遜に感謝しなければなりません。克服不可能に思えた数々の障害も、主に忠実な僕たちにとっては単なる通過点にすぎませんでした。「神には、なんでもできないことはありません」(ルカ1：37)と聖典に記されているとおりでからです。

末日の初めから靈感によって道が備えられてきました。主は予言者ジョセフ・スミスに靈感を与えて、信仰簡条第12条を示されました。そこにはこう記されています。「われらは、王、大統領、統治者、長官に従うべきを信じ、また法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」その靈感あふれる文章は、確かに今の世のために書かれたものです。予言者はどのような政治形態の下であろうと、福音がついにはすべての国々にもたらされることを理解していました。救いと昇栄のための儀式が、政治形態の違いを超えて人々の生活に祝福を及ぼすことを知っていたのです。そしてまた、正しい原則を教えられ、国の指導者に従って法律を守る忠実な者たちが、福音の祝福を最も多く享受できることも知っていました。

確かにこの驚異的な政変の中で、福音の祝福に最も豊かにあずかったのは、そのような人々でした。ここでその政変について分析を試みるのは適切ではありません。ただ、こうした国々では教会の指導者が早くから努力を重ね、そのような重大な政治的展開を手をこまねいて待つてはいなかった、という事実だけを述べるにとどめましょう。ヨーロッパ諸国には政治的圧力、イデオロギーの相違による緊張、多言語間のコミュニケーションという難題があることを指摘すれば十分です。戦争や条約による国境の変更もたびたびありました。数々の都市が爆撃によって破壊され、そのたびに、明るい未来を渴望する勇気ある市民たちが、不屈の精神力をもって都市を再建してきたのです。

私たちはこのヨーロッパの歴史に、強い関心を寄せてきました。教会にとってヨーロッパは重要です。現在の教会の指導者の祖先の多くは、ヨーロッパから渡ってき

.....

1991年、ラッセル・M・ネルソン長老とモルモンタバナクル合唱団はレニングラード(現サンクトペテルブルグ)の「夏の庭園」を訪問。その前年、ネルソン長老が福音を宣べ伝える地として再奉獻の祈りを捧げたのは、同じこの庭園だった。

PHOTOGRAPH BY CRAIG DIMOND



ました。イギリスをはじめ北ヨーロッパへの教会草創期の伝道活動によって、信仰あつい忠実な聖徒たちが改宗し、巢立ったばかりの教会に力と安定感をもたらしました。

ヨーロッパにおける近年の教会の発展は広範すぎて、この記事の中で十分考察することは困難です。そのため、ここでは限られた国々と数少ない状況にしか触れることができません。細部にわたる多くの重要な出来事を割愛しなければならなかったことを、初めにお断わりしておきます。

映画や舞台では、出演者の配役に加え、裏方となって働く人々の紹介が不可欠です。ここでは紙幅に制限があ

次ページ左——1982年8月、当時十二使徒定員会会員であったトマス・S・モンソン長老は、ドイツ民主共和国フライベルクステーキ部を開設した。左からフランク・ヘルベルト・アペルスステーキ部長、ハンス・B・リンガー地区代表、ゴットフリート・リヒター第一副伝道部長(ドイツ民主共和国ドレスデン伝道部)、七十人第一

定員会のロバート・D・ヘイルズ長老、ヘンリー・ブルクハルト伝道部長、モンソン長老、グンテル・シュルツ第二副伝道部長(ドレスデン伝道部)。

右——フライベルク神殿。1985年6月の献堂式に先立つオープンハウスには、9万人もの人が訪れた。

り、その義務が果たせません。ただ、1985年後半から1991年半ばにかけて、ヨーロッパ地域会長会で働いてくださった教会幹部の方々のたゆみない無私の奉仕に感謝して、ここに彼らの名前を記しておきたいと思います。ジョセフ・B・ワースリン、カーロス・E・エイシー、ハンス・B・リンガー、デレク・A・カスバート、ジョン・ソネンバーグ、ラッセル・C・テイラー、ジョン・R・ラサター、アルバート・チョールズ Jr.、スペンサー・J・コンディーの各長老です。勇気ある夫婦の宣教師や、最初の専任宣教師として派遣された皆さんも、特筆に値します。殊に、当時のドイツ民主共和国(旧東ドイツ)とチェコスロバキアの聖徒たちの模範的な行ないは、見過ごすことのできないものです。教会についてほかの国々の高官から照会があった際、彼らの優れた正しい模範があったために、2国の政府は肯定的な回答をしたのです。

七十人定員会のハンス・B・リンガー長老には、繰り返しこの記事に登場していただくこととなります。リンガー長老はヨーロッパ地域会長会にあって、特に中部および東ヨーロッパのこうした特別な国々について、責任を持っていました。リンガー長老はスイス出身の建築家であり、電気技師でもあります。同行してくださったリンガー長老の存在は、職業聖職者との交渉に慣れたこれらの国々の高官に、極めて不可解に映ったようです。実際、私たちのこうした特殊性のおかげで、相手の警戒心が解けたこともしばしばありました。高官たちは、アメリカ人の心臓外科医とスイス人の建築家が、現在は手を携えて教会のために全時間を捧げ、奉仕していると紹介されると、控えめに言っても、一様に驚きの色を示しました。リンガー長老には心からの謝意を表します。

同じく七十人定員会のデニス・B・ノイエンスンバングー長老はオーストリア・ウィーン東伝道部の伝道部長としての4年の任期を終え、最近解任されましたが、ここで紹介するほとんどすべての国で、彼は歴史に残る先

駆的な働きをしました。過去2年間にヨーロッパで組織された11の新しい伝道部のうち、6伝道部(チェコスロバキア・プラハ、フィンランド・ヘルシンキ東、ギリシャ・アテネ、ハンガリー・ブダペスト、ポーランド・ワルシャワ、ブルガリア・ソフィア)は、ノイエンスンバングー長老の在任中、彼の管轄下にある伝道部内の地方部から組織されたものです。今後も、さらに多くの伝道部が設立されるでしょう。これは驚くべき記録と言えます。

ワシントンD.C.にある教会外交委員会のベバリー・キャンベル姉妹とラルフ・W・ハーディ Jr. 委員長やそのほかの委員の方々は、各国大使や元首と接触するうえで大きな助けを与えてくれました。これらの方々と伴侶の皆さん、そして彼らと共に働く人々に心からの感謝を述べたいと思います。

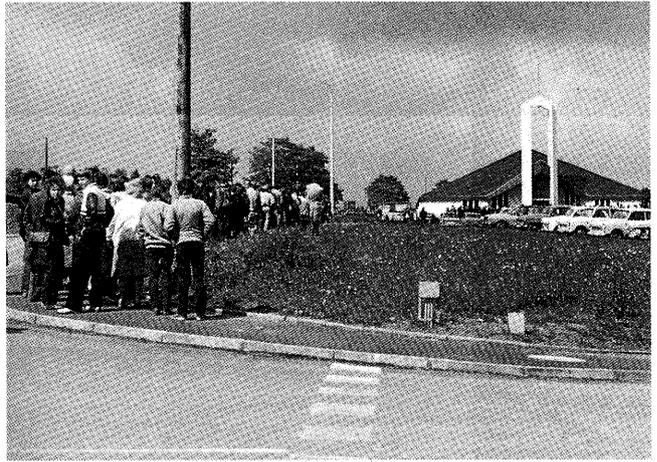
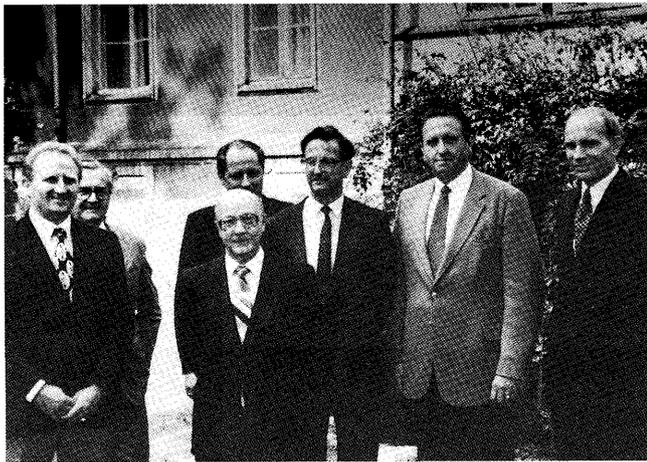
私たちは声をそろえ、感謝をもって、これらのすばらしい業績に主のみ手が置かれていたことを証します。私たちが召されて行なうのは「主の用向」(教義と聖約64:29)だからです。

地勢

この記事ではヨーロッパ中部と東部に位置する10カ国をおもに採り上げます。その地理上の分類は次のようになっています。

中部ヨーロッパには、ポーランド、ハンガリー、チェコスロバキア、そして1990年10月3日までドイツ民主共和国と呼ばれていた地域が含まれます。上記の日付でドイツ民主共和国は、ドイツ連邦共和国とひとつになりました。かつてドイツ民主共和国と呼ばれた主権国家の存在は、このドラマの極めて重要な位置を占めています。

バルカン諸国という呼称が示すように、バルカン半島にはユーゴスラビア、ルーマニア、ブルガリア、アルバニアとギリシャの5カ国が存在します。



PHOTOGRAPH BY TIM BROSNAHAN

この記事の執筆当時、ソビエト連邦は15の共和国から構成され、バルト海沿岸にはそのうちのバルト三国と呼ばれるエストニア、ラトビア、リトアニアがありました。この記事が皆さんの目に触れるころには、このような構成に変化の生じていることは、疑いの余地がありません。

ヨーロッパの東の境はウラル山脈です。ウラル山脈以東のソビエト領は、地理的にはアジア大陸に分類されます。したがってウラル山脈より西の地域は、東ヨーロッパの一部となります。

「中央ヨーロッパ」という表現はありません。ヨーロッパの人々にとって、この大陸の中心と目すべき場所はないからです。

さて、ここで舞台に教会を登場させ、時計の針を少し戻してみましょう。エズラ・タフト・ベンソン大管長は、1985年11月10日に第13代大管長に聖任されました。大管長として召しを受けた次の木曜日、大管長会は十二使徒定員会の会員一人一人に責任を与えました。私の責任には、トーマス・S・モンソン長老とニール・A・マックスウェル長老の後を引き継ぎ、ヨーロッパでのみ業の端緒を開くことが含まれていました。新しく大管長会に召されたモンソン長老は、およそ20年の長きにわたって、ヨーロッパ中部および東部での教会のみ業を指導してきました。マックスウェル長老は、ヨーロッパのそれ以外の地域に加え、イギリス、アイルランド、アフリカ地域のみ業に着手する責任を受けていました。

当時、ヨーロッパ中部と東部での教会の活動はごく限られていました。現在七十人のスペンサー・J・コンデュー長老はそのころ、オーストリア・ウィーン伝道部の伝道部長の任にありました。「フレンドシップ」のために何組かの勇気ある夫婦の宣教師が召され、コンデュー長老の指導の下で働いていました。1組の夫婦宣教師はポーランドで、もう1組はオーストリアからハンガリーへ入国し、さらに出国して、召しを果たしました。また1、2組の夫婦宣教師が各々ユーゴスラビアとギリ

シャで働いていました。もちろんそのころ、ソビエト連邦にはだれも召されていませんでした。

一方、ドイツ民主共和国とチェコスロバキアでは、数十年に及ぶ政治的閉塞状態の中で、信仰深い忠実な教会員たちが生活していました。無論、そこに夫婦宣教師はいませんでした。会員たちの活動は政府の制約を受けていました。たとえば、1975年に私が医師として入国許可を得て妻とチェコスロバキアを初めて訪れたとき、プラハ滞在中に数人の聖徒たちとある会員のアパートで会いました。そこに行くには、かすかな明かりにともされた暗い階段を昇るのです。そこで、ある教会員夫婦の15歳になる娘に会ったことを、今でもはっきりと覚えています。夫婦はそれまで、自分たちが教会員であることを娘に一言も漏らさなかったのです。その晩初めて、娘は危険が伴うこともある事実を知らされました。会合の後、地方部長は車でホテルからかなり離れた所まで、私たちを送ってくれました。これは、彼が私たちと一緒にいるところを官憲に見られないための配慮でした。このような制約下では、チェコスロバキアもドイツ民主共和国も、伝道活動への希望はまったくありませんでした。いずれも第二次世界大戦以前は、宣教師が派遣されていた国なのです。

神殿によって美しさを増す国土

1985年には記念すべき出来事がありました。ドイツ民主共和国内に神殿が建てられたのです。この神殿は、1985年6月29日にゴードン・B・ヒンクレー副管長によって奉獻されました。その奉獻の祈りは、次のような輝かしい希望に満ちたものでした。「この日が教会の歴史の中に長く覚えられますように。この日が感謝と喜びをもって思い出されますように。主の民にとって新しい喜びの日の始まりとなりますように。」

主はまことにこの願いを聞き届けられたのです。この

祈りは約束の予言となりました。今振り返って見ると、神殿が計り知れない影響を与えたことは明らかです。神殿から放たれる霊的な光が、その後の変動に大きな影響を与えたことは確実です。この主の宮居の建立を境に、あらゆる良きことが続けて起こったようです。

以上、ドラマの背景を一応整理し終えたところで、各国でのみ業の具体的な進展状況に話を移しましょう。まずは、中部ヨーロッパの北端からです。

ポーランド

1986年5月31日、私はトーマス・S・モンソン副管長と、リンガー長老と共に宗務関連業務担当のアダム・ロバトカ氏、非カトリック関係担当のタデウシュ・デュシツク氏らと会見しました。席上私たちは希望をふたつ述べました。ひとつは若い宣教師たちがポーランドに伝道のため入国すること、もうひとつは、教会堂の購入もしくは建築の許可です。驚いたことにこのふたつの願いはすぐに許可されたのでした。

1989年6月15日、ポーランドの地で最初の末日聖徒の教会堂の^{（ついで）}鋳入れ式が行なわれました。そして完成の後、1991年6月22日に献堂されています。

1990年7月1日には、本部をワルシャワに置くポーランドで最初の伝道部が、ウォルター・ウィップル伝道部長の下に開設されました。ポーランドから初めて召された専任宣教師は、ユースラ・アダムスカという若い姉妹で、ワシントン州タコマ伝道部に召されました。アダムスカ姉妹は現在ワルシャワ在住で、最近のモルモンタバナクル合唱団のワルシャワ公演にナレーターとして参加しました。

ドイツ民主共和国

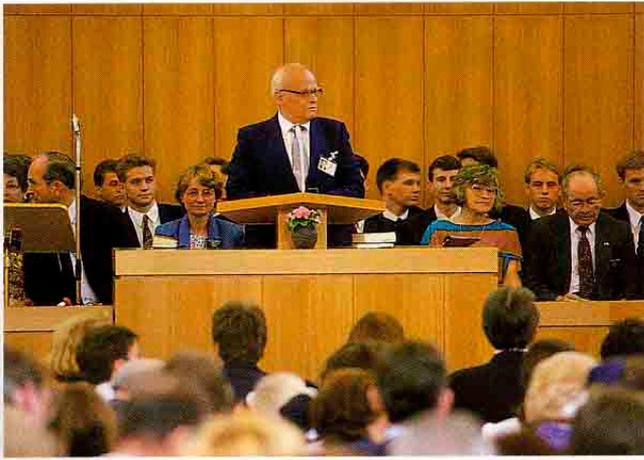
教会の初期の信仰あつい改宗者の多くは、近年までド

イツ民主共和国として知られていた地域の出身者でした。たとえばカール・G・メーザー兄弟はドレスデン近くのマイセンの生まれでした。(1875年、ユタ州プロボのブリガム・ヤング学院の学長に就任)第二次世界大戦終結後、この地の教会員たちは、静かに、注意深く、献身的にその業を進め、モンソン副管長、ワースリン長老、エイシー長老、リンガー長老、そのほかの教会幹部の慎重な指導により、やがて政府高官の深い尊敬を得るに至りました。要人たちの目にも、教会員が正直で善良な市民であることは明らかでした。文字どおり、これらの聖徒たちの高い道徳心と献身的な信仰が、フライベルク神殿の建設を実現させたのです。

ヘンリー・ブルクハルト兄弟が神殿長として、妻のイング姉妹は介添役として召されました。ブルクハルト兄弟姉妹は長年の間、ドイツ民主共和国で聖徒たちの指導者として敬愛されてきました。あるとき地域大会で、管理者のモンソン副管長が、過去にブルクハルト神殿長から祝福を受けたり、召しや^{（あんしめ）}按手任命を受けたり、カウンセリングで助けられたりした人たち全員に手を挙げてもらったことがあります。会場にいたほとんどの人が手を挙げました。ブルクハルト兄弟姉妹の影響力の大きさは計り知れません。

1988年10月28日、モンソン副管長と私は、リンガー長老とブルクハルト神殿長、ならびに教会のほかの指導者と共に、東ベルリンで政府高官に面会しました。そのときは率直な希望をふたつ申しあげました。第1に国外にいるドイツ民主共和国国籍の宣教師たちが入国する許可と、第2に同国のふさわしい長老たちが国外の伝道地で2年間伝道する許可を受けたいということでした。このふたつの願いはかなえられました。まさに歴史的瞬間でした。(トーマス・S・モンソン、『神に感謝を捧げん』「聖徒の道」1989年7月号, pp. 54-57参照)

モンソン副管長が同国の宣教師たちの行くべき国、あるいは送ってはならない国の希望を尋ねると、政府は教



左—1991年6月、ポーランド最初の末日聖徒の教会堂が献堂された。

右—ポーランド人の聖徒たちにとって、最初の教会堂



の献堂は夢の実現だった。

下—娘を連れてこのふたりの母親は、ハンガリー・ブダペストの地方部の集会に出席した。

PHOTOGRAPHY BY CRAIG DIMOND





PHOTOGRAPHY BY CRAIG DIMOND



会に対して驚嘆すべき敬意を示しました。この点については当事者たちだけで協議した結果、広報官がこう答えたのです。「モンソン副管長、私たちはあなたを信頼しています。どこでもあなたの望む国へ送っていただいで結構です。」最初の10人の長老たちは、イギリス、アメリカ合衆国、カナダ、アルゼンチン、チリの各国へ召されました。彼らはその後全員成功のうちに伝道を終え、出身地へ名誉の帰還を果たしました。

ヴォルフガング・パウル伝道部長に率いられた教会の最初の宣教師たちがドイツ民主共和国に入国したのは1989年3月28日のことで、人数も少数でした。現在では宣教師の数はかなりの人数に上っています。その後の1年半の間に、1,100人を超える改宗者のバプテスマが行なわれました。

パウル伝道部長夫妻がドレスデンにやって来たとき、児童にはロシア語の勉強が義務づけられていました。そのため、パウル家の子供たちのために女性の家庭教師が雇われました。そのうちこの家庭教師は改宗してバプテスマを受け、後に彼女の両親もまたバプテスマを受けることになりました。

1989年の11月にベルリンの壁は崩壊し、1990年10月3日のドイツ統合にまで時局は動いていきます。それから3週間足らずの10月21日に、モンソン副管長とリンガー長老と私の3人は、ドイツのこの地方の教会を再組織するため、ベルリンを再訪しました。ベルリンでのこの大会には、一般大会で2,500人も出席がありました。聖徒たちは再び共に集えたことに深く感謝し、出席者はほとんど皆、涙を流していました。それから私たちは、ベルリンで150人以上の宣教師とも会う機会がありました。

この伝道部は1991年7月1日に分割され、新しくドイツ・ベルリン伝道部が開設されました。パイオニアとして大きく貢献したパウル伝道部長に引き継いで、マンフレッド・H・シュッツ兄弟が伝道部長に召されました。ドイツ・ドレスデン伝道部では、マグヌス・R・マイザ

ー伝道部長が任命されました。

今やドイツとその国民は、政治的には再びひとつに結ばれました。教会員は、物理的にだけでなく、愛し仕える主イエスの下で霊的にも結ばれたのです。

チェコスロバキア

この国で教会が正式に認可されるまでの道のりは、険しく失望に満ちたものでした。ヨーロッパでの責任を受けてから、リンガー長老と私は、少なくとも年1度は政府の要人と会うためにチェコスロバキアを訪れていました。そのうち2度の大西洋横断の旅は、面会をキャンセルされたり、「申請は目下検討中」との一言で希望が崩されたりしたこともありました。しかし、1990年2月6日に再びプラハを訪れると、それまでの交渉相手は職を退いていました。新任の高官は私たちの話を聞き終えると、「今月中に申請は認可されるでしょう。あなた方の信者は再び誇りをもって神をあがめることができるようになります。宣教師たちも、もう一度入国できるはずです」と明言したのです。認可は2月21日に下り、1990年3月1日に発効しました。

この重大な宣言があったとき、私はこの物語の本当の主演はチェコスロバキアの地方部長、イジー・スネデルフレ兄弟であることに気づきました。その2年半ほど前、リンガー長老と私は、教会の認可の申請はチェコスロバキア人の会員でなければ提出できないことを知らされました。私たちふたりは、スネデルフレ夫妻の自宅を訪問し、宗務会議議長から知らされたばかりの情報について説明しました。チェコスロバキア人の指導者や思想家が、宗教的あるいは反体制的思想のために投獄されたり、殺されたりしたことを知っていた私たちは、スネデルフレ兄弟に、指導者として彼に認可の申請を依頼することはできないし、するつもりもないと話しました。しかしスネデルフレ兄弟は、ほんの一瞬考えただけで

前ページ左——ブダペストの地方部の集會に出席するハンガリーの青少年。

右——ブダペストの聖徒たち。アラヨスネ・ペカルス姉妹(中央)と息子アラヨス、娘ニコレットとクローディア。

謙虚に言ったのです。「私は行きます。私がしましょう。」それを聞いた妻のオルガ姉妹は涙を流しました。彼らは抱き合い、こう言いました。「私たちは、必要なことは何でもします。これは主のためですし、主のみ業は、私たちの自由や生命よりも大切なのですから。」

数カ月後、書類が整うと、スネデルフレル兄弟は直接提出しに行きました。彼とほかの教会員はそれ以来、当局の厳しい監視の目にさらされることになりました。聖徒たちは勇気と信仰を堅持して定期的に断食と祈りを繰り返し、求められていることはすべて守って、あの栄えある認可の日を迎えたのです。スネデルフレル兄弟姉妹をはじめとする雄々しい会員たちに、心から敬意を表します。彼らは度重なる事情聴取や危険を耐え抜いたので

す。スネデルフレル兄弟は、1991年9月1日からドイツのフライベルク神殿を管理するよう召されました。6年以上に及んで献身的かつ忠実に務めたブルクハルト神殿長の後を引き継ぐことになったのです。オルガ・スネデルフレル姉妹は、ブルクハルト姉妹の後任として介添え役を務めています。

1990年7月1日、チェコスロバキアで40年間禁止されてきた伝道活動は、リチャード・W・ウインダー長老をチェコスロバキア伝道部の伝道部長に迎えて、再開されました。ウインダー伝道部長は青年時代にこの国で伝道した経験があり、妻のバーバラ姉妹は中央扶助協会会長の召しを解任され、彼らだけが果たし得るこの極めて重要な任務のために、この地に赴任してきたのです。

ハンガリー

私は大管長会の委任の下に、1987年4月19日の復活祭の日曜日、ブダペストのゲレルトの丘でハンガリーの地を奉献する特権に浴しました。2日後、リンガー長老と私は宗務会議長のイムレ・マイクロシュ氏と会見しまし

た。この会合は多少張り詰めた雰囲気でも始めました。私たちが歓迎されていないことは明らかです。話し合いの進捗状況は思わしくありません。そのとき、私はみたまに感じて、ちょうど2日前にハンガリーとハンガリー国民のために特別な使徒の祈りを捧げたことを、この政府要人に話しました。これを聞くや否や、相手は表情を和らげ、私たちの話に耳を傾けてくれたのです。30分の予定だった会見は1時間半続きました。以来、議長は私たちの友人、協力者になってくれたのです。その後、会見は成功のうちに繰り返され、14カ月後の1988年6月14日、リンガー長老と私はブダペストを再訪し、ハンガリーにおける教会の公式認可の式典にマイクロシュ氏と共に出席したのです。

1989年10月には全ヨーロッパの伝道部長夫妻を一堂に集めた年1度のセミナーが、ブダペストで開催されました。モンソン副管長と妻のフランシス・モンソン姉妹も出席しました。ちょうどセミナー当日の10月17日、ハンガリー議会はハンガリー人民共和国からハンガリー共和国に国名を変更し、ハンガリーは今や民主国家に転身したのです。

1990年7月1日には新しい伝道部が開かれ、ジェームズ・L・ワイルド伝道部長が管理者として召されています。ブダペストの教会堂はモンソン副管長によって献堂され、そこを含めた数カ所の拠点で教会は発展しつつあります。

ユーゴスラビア

この地は1985年10月31日、大管長会に召される直前のモンソン長老によって奉献されました。教会の指導者として私が初めてこの国を訪れたのは、1987年4月のことです。リンガー長老と私は、セルビアとクロアチア、ユーゴスラビア連邦の宗務庁の長官たちと会見しました。通訳を務めたのは以前ブリガム・ヤング大学でバスケッ



左——ユーゴスラビアの地方部長イワン・バレク兄弟と妻のボニー姉妹。

右——オーストリアにあるヨーロッパ難民キャンプの子供たちと、末日聖徒のドイツ人宣教師。



下——ユーゴスラビアのザグレブで伝道するオーストリア・ウィーン東伝道部のライアン・コックス長老とキム・シンブソン長老。



トボールの花形選手だったクレシミル・チョスイッチ兄弟でした。政府高官たちは、モルモン教会の指導者とは格別会いたい気持ちはなかったものの、国内のスポーツ界では英雄的存在でテレビにもよく出演しているチョスイッチ兄弟に会えるのを楽しみにしていたと告白したものです。

今やザグレブには合法的に許可を得た教会堂が建設され、そのほかの主要な都市でも会員たちが集っています。またオーストリア・ウィーン伝道部から長老や夫婦の宣教師たちが派遣され、福音を広めています。この国を脅かし続けている国内紛争が平和のうちに解決するよう、私たちは心から祈っています。この美しい国にはたくさんのお備えられた人々が住んでいるのです。

ルーマニア

リンガー長老と私が初めてルーマニアのブカレストを訪れたのは1987年10月のことです。このときは予備交渉の段階で、政府高官たちとの面識を得ました。

1990年2月、あの血まみれの革命によってルーマニアの長期に及んだ独裁政権が倒れてから5週間後のことです。私たちは再びブカレストを訪れました。2月9日、私は大管長会の承認の下に、チシミジウ公園においてルーマニアの地を奉獻しました。この公園の名は「水を運ぶ者」という意味です。サマリヤの井戸で主があの人に残されたメッセージを考えると、これは非常に象徴的に思えます。イエスは女にこう言われました。「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。」(ヨハネ4:13-14)

政府の新しい指導者たちに、教会がどのような援助ができるか尋ねると、孤児たちへの援助を要請されました。

その話によれば、ブカレストだけで3万人以上の孤児がいるとのことでした。さっそく孤児院のひとつを訪問してみました。私は医師としてそれまで随分悲惨な光景を目にしてきました。インドのボンベイで貧しい人々のための救済病院で働いたことも、中華人民共和国やそのほかの国々で、困難な状況の下に外科手術を施したこともありましたが、あんな孤児院で見た光景はそのどれにも増して悲劇的なものでした。

援助の手を差し伸べるため、教会員は惜しみなく、かつ人道的な方法で犠牲を払いました。特にヨーロッパの聖徒たちに賛辞を送りたいと思います。彼らはこの不幸な子供たちの運命を少しでも明るくしようと、必要な物資を数えきれない台数のトラックに積み込んで送り出してくれたのです。

専門技術を持つ何人かの熟練した年配の末日聖徒が、ブカレストでの特別な奉仕の求めに応じてくれました。彼らはモルモン経の時代のアンモンがしたように、みずから進んで救援活動に従事しているのです。その勇敢な働きは間違いなく、ほかの開拓者たちと同様に教会の歴史に残るものです。

ルーマニアでは、こうした宣教師たちはハンガリー・ブダペスト伝道部の伝道部長の指示の下で働いていて、会員と求道者たちは定期的に礼拝集会に集っています。

ブルガリア

1988年10月30日に、リンガー長老と私が初めてブルガリアの首都ソフィアに到着したとき、仲介を依頼した「第三者」から、空港には出迎えがあるはずで、要人との会見の予約も取ってあると確約されていました。(ちなみに、私たちの経験では全体主義国家の要人たちはほとんどと言ってよいほど、予定を文書で確認することはありません)そこで私たちは希望を抱いてブルガリアに出かけました。しかし、到着したのは夜更けで、出迎え

次ページ左——ブリガム・ヤング大学の学生とエストニア・タリンの教会員(左)。モスクワ・ポリショイ劇場の外で。

右——1991年6月24日、教会の正式認可を発表するロシア共和国のアレクサンドル・ルツコイ副大統領(右)。同席しているのはフィンランド・ヘルシンキ東伝道部のゲリー・L・ブラウニング伝道部長(左)と十二使徒定員会のラッセル・M・ネルソン長老。

の人はいませんでした。仕方なく乗ったタクシーには別のホテルに連れて行かれ、間違いに気がついた私たちは、荷物を片手に吹雪の中を歩いて目当てのホテルに行く羽目になりました。翌日もいらいちは募るばかりで、2カ国語を話すホテルの交換手は、私たちが面会するはずの要人も役所も存在しないと言うのです。まったくのお手あげでした。私たちにできることと言えば、主に助けを求めて祈ることだけです。

祈りはこたえられました。翌朝10時、不思議な巡り合わせでルーマニア宗務庁長官のツベトコ・ツベトコフ氏と面会できたのです。彼はソフィアへ帰ってきたばかりで、通訳も同行していました。信じられないような幸運でした。

最初、会心の雰囲気は実に冷ややかなものでした。私たちが来ることは知らされていなかったのです。通訳を介して彼は「ネルソンだって？ リンガー？ モルモン？ 聞いたこともない」と不機嫌そうに言いました。

私は、「おあいこですね。私もあなたの名前は初めてお聞きします。お互いに面識を得るチャンスじゃないですか」と答えました。これが全員の失笑を買い、会見はその後スムーズに運んだのでした。

リンガー長老と私は1990年2月にソフィアを再び訪れ、大管長会の承認の下に、2月13日、ナ・スボボダ公園(「自由公園」の意)で使徒による奉獻の祈りを捧げました。

この訪問で、私たちはツベトコフ氏だけでなく、数人の政府高官、ならびに報道関係者たちと会見し、国際事業団の理事には英語教師の派遣を要請されました。私たちはその場で確約し、その依頼にこたえるために有能な教師が召され、ブルガリアに送られました。この理事とは、彼が1990年10月にソルトレークシティを訪問した際、旧交を温めることができました。彼はブルガリアで教え始めた姉妹宣教師や夫婦宣教師の働きに感謝し、称賛を惜しみませんでした。この宣教師たちの接触を通じ

て求道者の紹介があり、何人かがすでに改宗しています。

1991年7月1日には、教会で268番目の伝道部が開設され、キリル・キリアコフ兄弟がブルガリア・ソフィア伝道部長として召されました。キリアコフ伝道部長夫妻は、ふたりともブルガリア生まれです。1991年7月10日、ブルガリア政府は教会を正式に認可し、教会に集う聖徒たちと求道者たちの数は確実に増えています。

ギリシャ

1985年12月に初めてアテネを訪問してから現在まで、ギリシャで教会は着実に成長してきました。ギリシャ・アテネ伝道部は1990年7月1日、R・ダグラス・フィリップ兄弟を伝道部長に迎えて、開設されました。それまで、ギリシャ国内の支部はみな、初めにオーストリア・ウィーン伝道部から指示を受け、次いでオーストリア・ウィーン東伝道部の傘下に加えられました。ギリシャの会員たちは、友人を教え、支部を強めてくれる自分たちの専任宣教師を迎えられたことに感激しました。会員たちは、古代と現代の使徒たちの業を身近に感じながら、みずからこの地で大いなる業を果たしているのです。

アルバニア

この国は1967年に宗教を違法とし、無神論を公式に宣言した国です。

それにもかかわらず、ダリン・H・オークス長老とリンガー長老は1991年4月にアルバニアの首都チラナを訪れ、無神論を謳う憲法をごく最近に放棄したこの国の要人と会い、この国を取り巻く状況をつぶさに見ることができました。この国の国民が福音と教会員の寛大さに触れ、祝福を受ける機会を、ここ数十年の間で、現在が最も顕著になっていると言えるでしょう。



PHOTOGRAPHY BY CRAIG DIMOND



PHOTOGRAPH COURTESY OF CHURCH NEWS

ソビエト連邦共和国

ソ連は15の共和国を有する連邦国家であり、そのひとつがロシア共和国でした。ほかにはアルメニア、グルジア、ウクライナ、アゼルバイジャン、バルト諸国などの共和国があります。

ソビエト連邦には外科医として以前に3度訪問したことがありましたが、1987年6月、リンガー長老と私は教会の指導者として、実情調査のために初めてモスクワを訪れました。私たちはロシア正教、プロテスタント、ユダヤ教などのほかの宗派の指導者と共に宗務会議議長と会見しました。ラビの指導者、アドルフ・シェイビッチ師の招きを受けて、私たちはモスクワ市内のユダヤ教会で「バル・ミツワ」の儀式(訳注——ユダヤ教男子を成人社会に迎え入れる荘厳な儀式)に出席しました。

私たちは1989年8月にモスクワに戻り、カリフォルニア州の篤志家、アーマンド・ハマー博士とユタ州のジョン・M・ハンツマン兄弟と共に、8月9日、同意書に調印し、教会は1988年12月のアルメニア大地震による被災者の救済事業を援助することになりました。話題はそれですが、この事業のために惜しみなく、自発的に基金を寄せてくださった教会員の皆さんの信仰と思いやりに、心から感謝します。教会としてはまったく募金しなかったのですが、貴重な義援金^{ぎえんきん}が自発的に世界中の会員から寄せられました。ある人々は直接本部に、またほかの人々は監督や支部長を通して送金してくださいました。

2度の訪問で、私たちは宗務会議議長と会い、教会の承認は連邦レベルではなく、地域単位で下されることを知りました。しかも、嘆願書はその地域に在住する20人以上の成人のソビエト市民による連名で申請しなければならないというのです。そのうえ、ほかの多くの共和国と同様、自由に福音を宣伝することは、宗教を望まない市民の権利を侵害する恐れがあるという理由で、許可されないのです。私たちは大変なジレンマに陥りまし

た。宣教師なくして、どうしてひとつの地域に20人以上の会員を集められるでしょう。しかも、まず最初に20人の会員を獲得して合法的な承認を得なければ、どうして福音を広められるのでしょうか。しかし思い起こしてください。「神にはなんでもできないことはありません。」なんと数カ月後、レニングラード(現サンクトペテルブルグ)には20人以上の会員が集っていたのです。

ソ連のこの開拓者となった教会員たちの改宗物語は、まさに驚嘆に値する主のみ業と言えます。支部長夫妻は1989年7月1日に、ハンガリーのブダペスト滞在中に教会を知り、バプテスマを受けました。レニングラードに戻ったふたりのために、フィンランドのヘルシンキからロシア語を話すホームティーチャーが召されました。別の姉妹は一時的にレニングラードを離れ、奇跡的な方法で教会に導かれました。このスベトラーナという若く美しい母親は、ロシア語の聖書を手に入れたいと祈りを通して主に願いを求めています。ロシア語の聖書は珍しく、貴重で大変高価なものです。1989年の秋、彼女は夫と幼い子供と共に、聖書を求めてヘルシンキへ出かけました。ヘルシンキの公園を歩いていると、彼女は枯れ葉に埋まっている何かに踏み当たりました。手に取ってみると、なんとそれはロシア語の聖書でした。祈りはこたえられたのです。彼女は喜びにあふれ、公園に子供を連れて来ていた女性に、この信じられない拾い物のことを話しました。この女性はスベトラーナ姉妹にこう答えたのです。「イエス・キリストについて書かれた、もうひとつの本も欲しくありませんか。これもロシア語で書いてありますが……。」スベトラーナ姉妹はもちろんすぐに同意しました。するとその女性はロシア語のモルモン経を手渡し、教会へ招待したのです。この女性の名はライジャ・ケンパイネンといい、夫は当時フィンランド・ヘルシンキ伝道部バルト海沿岸地方部の地方部長として召されていた、ユーシ・ケンパイネン兄弟でした。それから間もなく、スベトラーナ姉妹は末日聖徒イエス・キリスト教

会の会員となり、家族と共にレニングラードに戻ったのでした。

これら初期の改宗者たちは、特別な友人を自宅に招き、イエス・キリストの回復された福音を紹介しました。そのうち多くの人々が喜んで宣教師のメッセージを受け入れ、バプテスマを受けたのです。

1990年4月26日、私たちは政府の役人と会い、レニングラード支部の承認のための申請書を提出しました。その同じ日、私はネバ川に隣接する「夏の庭園」で感謝の祈りを捧げ、この地を再奉獻しました。そこは1903年8月6日、当時の十二使徒評議員会会員、フランシス・M・ライマン長老が福音を宣べ伝える地としてロシアを最初に奉獻した「マルスの広場」のすぐ近くです。

1990年9月13日にレニングラード支部は正式に認可されました。このように貴重な先例ができたことで、ほかの都市でも教会が承認されるようになるでしょう。

ソビエト連邦のパスポートを持つ最初の宣教師はエストニアのタリン出身、ジャンス・シラ長老です。バプテスマを受けた直後から、彼は伝道に出ることを切望していました。しかし障害が多く、実現の可能性はほとんどないように思えました。出国ビザ、伝道資金、母親の生活保障など、解決しなければならない問題が多かったのです。スティーブン・R・ミーチャム伝道部長は彼に、戒めを守って信仰を保てば、正しい願いはかなえられるだろうと助言しました。障害は奇跡的な方法で解消し、シラ長老は現在、ユタ州ソルトレークシティー伝道部で宣教師として働いています。

このように、み業を進めていくうえで主の導きのみ手を感じられる逸話は、数多く伝えられています。ソビエト連邦のバルト海沿岸地域——すなわちレニングラード、ビボルグとエストニアの首都タリン——で教会が最初に慎重な交渉を始めた当時、フィンランド・ヘルシンキ伝道部を管理していたのはミーチャム伝道部長でした。ミーチャム伝道部長の貢献に対して特別な賛辞を贈らなけ

ればなりません。この大切なみ業は今、1990年7月1日に新しく創設されたフィンランド・ヘルシンキ東伝道部のゲリー・L・ブラウニング伝道部長に引き継がれています。

大管長会の委任を受け、私は1990年4月25日にエストニアの地を奉獻しました。そのために選ばれたのは、バルト海とタリンの街を見下ろせるラウルラバと呼ばれる所でした。エストニア人の中には、ここを国の魂が宿る場所と考えている人々もいます。そこには自然の地勢によってできた円形劇場があり、人々が集まってきて合唱すると聞きます。早朝、その丘の上に立つ常磐木の下で、奉獻の祈りが捧げられました。

現在、リトアニアとラトビアには支部はありません。機が熟すれば、この2共和国の人々も教会とその貴重な救いの福音を見いだせるようになるでしょう。

1991年5月28日、ロシア共和国は末日聖徒イエス・キリスト教会を正式に承認しました。この歴史的な発表は、1991年6月24日に共和国副大統領アレクサンドル・ルツコイ氏によって、モスクワで行なわれました。こうしてロシアは、旧ソビエト連邦15共和国のうち、エストニアに次いで2番目に教会を承認した共和国になりました。

ソビエトの会員の新しい信仰を育て、伝道の熱意を支えるために専任宣教師が召されました。最初宣教師たちは観光ビザで入国し、ほぼ3日から4日という短い期間働いては、ヘルシンキやウィーンの伝道本部に戻っていました。タリンに最初に宣教師が来たのは1989年12月8日、レニングラードには1990年1月19日、キエフには1990年10月7日、モスクワには1990年10月18日のことでした。1991年7月現在、上記の都市には各々ふたつの支部があります。

ロシア人の末日聖徒の祭司が初めてのロシア人の改宗者にバプテスマを施したのは、1990年2月17日、レニングラードにおいてでした。一方、他国に一時的に在住している間に教会を知ったソビエト国民が多く帰国し、それぞれの故郷で教会の発展に寄与しています。このこと



PHOTOGRAPHY BY CRAIG DIMOND

上——1991年、レニングラードのフィルハーモニックホールでのツアー最後のコンサートで、モルモンタバナクル合唱団に熱狂的な拍手を送る観客(右)。



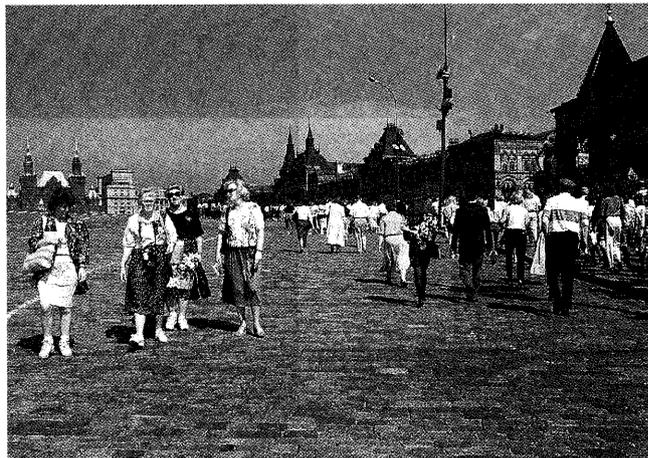
下——レニングラード市内を観光するラッセル・M・ネルソン長老夫妻とタバナクル合唱団員。

PHOTOGRAPH COURTESY OF CHURCH NEWS





PHOTOGRAPHY BY CRAIG DIMOND



から、「異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者……、神の家族」(エペソ2:19)として新しい仲間を受け入れることが、世界中に教会を広める機縁になるという事実がわかります。

教会員は現在、ロシアのクルガン、レニングラード(現在のサンクトペテルブルグ)、モスクワ、ソチ、ピボルグ、ザレノグラードの諸都市、エストニアのタリン、ウクライナのキエフ、グルジアのスフミ、そのほかの都市に住んでいます。

1991年6月にアルメニア共和国は、教会と世界中の会員から寄せられた地震被災者への支援に感謝して、首都エレバンに教会のための建設用地を寄贈しました。支援の例を挙げれば、ジョン・M・ハンツマン兄弟と妻のカレン姉妹、ならびに家族は、1988年12月の壊滅的大地震によって家を失った何千人もの被災者のために義援金を提供し、自らも奉仕活動に従事しました。ソルトレークシティー在住の建築業者デビッド・M・ホーン兄弟は、被災者が安全に住む住宅建設のために時間と技術を提供するという、特別任務の召しにこたえました。コンクリート・プレハブ製造工場が1991年6月24日にエレバンで奉献され、年間6,500戸のアパート建設に必要なユニットを製造し、2万5,000人に住宅を供給できる見込みになっています。

アルメニア共和国は1991年6月24日、ダリン・H・オークス長老によって奉献されました。オークス長老と私はエレバンの町を見下ろす丘に腕を組んで立ちました。近くにはアルメニアの母を表わす記念碑が建っていました。そしてあまり遠くない所に、ノアの箱舟がその昔とどまったといわれるアララテ山の雪をかぶった峰も見えていました。(創世8:4参照)

1991年6月に、モルモンタバナクル合唱団はヨーロッパ8カ国を巡る歴史的な公演旅行を敢行しました。コンサートはポーランドのワルシャワ、ドイツのフリードリッヒスドルフ、フランクフルト、ドレスデン、ベルリン

の各都市、ハンガリーのブダペスト、チェコスロバキアのプラハ、ソ連のモスクワとレニングラード、フランスのストラズブール、スイスのチューリッヒ、オーストリアのウィーンでも行なわれました。行く先々でタバナクル合唱団が伝える信仰と献身の歌声は、人々の心を打たずにはおきませんでした。この公演旅行については教会の機関誌に詳細な記事が掲載されています。(ジェイ・M・トッド『みたまのアンコール』「聖徒の道」1992年4月号, pp. 32-48; ラッセル・M・ネルソン『模範から学ぶ』「聖徒の道」1992年1月号, pp. 64-68参照)

オークス長老と私は恵まれてこの意義深い公演旅行に同行しました。ツアー終了後帰国して1991年7月3日にエズラ・タフト・ベンソン大管長に面会し、ツアーの成功を報告しました。ついで私たちは、ロシア共和国で教会が完全に認可されたことを示す真正の書類の写しをお見せしました。そのときの大管長の喜びの表情は、決して忘れることはないでしょう。1984年に私たちが十二使徒定員会に召されて以来、大管長との最も大切な思い出のひとつとなりました。そして、ベンソン大管長が以前たびたび話されたことを、私はまざまざと思い出しました。大管長にとっては忘れられない経験です。1959年10月1日のこと、大管長はモスクワのある教会の説教台に立ち、雄々しく会衆に語りかけました。

「天父は遠くにおられるのではありません。私たちのごく近くにいらっしゃるはずです。神は生きておられます。生きておられると私は知っています。神こそ私たちの父であります。イエス・キリストは世の贖い主であり、この地球を見守っておられます。主はすべてのことを導いてくださる方です。恐れず、主の戒めを守り、互いに愛し合い、平和のために祈りましょう。そうすればすべてはよくなるでしょう。」

ベンソン大管長の話によれば、「一言一言通訳されていく間、女性たちがハンカチを取り出し、ある人の言葉を借りれば、『母親がひとり息子との永遠の別れを惜し

前ページ左——モスクワで聖餐会に出席するソビエトの聖徒たち。

右——モスクワの有名な赤の広場を散策するタバナクル合唱団員。

むときのようにハンカチを振り』始めた」のでした。

この記事の中の出来事が進行していた時期に教会を管理してこられた予言者は、自由のために説教し、モルモン経を研究すること；モルモン経をもって「洪水の如く地を」（モーセ7：62）満たすことを教えてこられました。そして、ロシア共和国で教会が正式に認可されたという知らせを聞き、生きて自らの収穫の一部を刈り取るという、幸福を味わうことができたのです。

過去と未来を考える

この記事は、ある意味では、与えられた任務の要約と個人的な報告書の、両方の役割を果たしています。5年以上に及ぶこの重要な期間に、私はヨーロッパにおける主のみ業を担当しましたが、その一部を実際に現場に居合わせた者の目から振り返ってみたものです。大管長会は、このたび、十二使徒定員会会員の任務の割り当てを変更しました。大管長会はこの神聖な定員会の会員一人一人の先任順位が上がるごとに、主のみ業のすべての面における、また全世界の教会と教会員に関する知識を深める必要があることを知っておられるのです。そのために、1990年12月1日、ヨーロッパで主のみ業の端緒を開く責任は、ダリン・H・オクス長老の有能な手に引き継がれました。オクス長老はすでにその新しい任務の中で、多くのすばらしい貢献をしています。

ヨーロッパをはじめとする世界各国での様々な任務に従事する間、私の妻のダンツェルと家族は信仰の祈りをもって私を支えてくれました。このような旅行中、起こり得る危険を承知しながら、一言も不平を言うことはありませんでした。彼らの支持に心から感謝しています。

私が記録したこのドラマは、——教会の成長の速度を考えれば、この記事が皆さんの目に触れるころには、さらに新しい事態が展開しているでしょう——ヨーロッパという激動の舞台上で上演されるほんの一部にすぎません。

一方最近では、アフリカ、南アメリカ、中央アメリカ、南太平洋、アジアの多くの国々で、十二使徒によって奉獻の祈りが捧げられています。

多くの人が形容するように「信じ難い」速度で伸び続ける教会の発展を思うと、主が予言者ジョセフ・スミスを通して授けられたすばらしい教えを思い起こす必要があります。それは1831年9月11日に、オハイオ州カートランドに程近いモーレー農場に集まった長老たちに与えられたものです。「この故に善を為すにうむことなかれ。これ汝ら今偉大なる一事業の基礎を置きつつあればなり。」（教義と聖約64：33）

ウィルフォード・ウッドラフ大管長はそのときの様子を詳しい記録に残しています。「日曜の夜に予言者ジョセフ・スミスは、神権者は皆その丸太造りの小さな塾に集まるように言った。そこはおよそ13平方メートルの狭い所で、当時カートランドにいた末日聖徒イエス・キリスト教会の全神権者がそこに集まった。……予言者はイスラエルの長老たちに、自分と共にみ業について証を述べるようにと言った。証が終わると予言者はこう語った。『兄弟たちよ、今夜あなた方の証に強められ、教えられることが多々あった。しかし、今主のみ前で、あなた方は母のひざにいる赤子ほどもこの教会と神の王国の行く末を知っていないと申しあげたい。あなた方はわかっていない。……この教会は南北アメリカを満たし、全世界を満たすであろう。』（「大会報告」1898年4月6日、p. 57参照）

予言者は教会の行く末を知っていました。今や私たちは、予言者が1世紀半前に思い描いていた成長の一部を目にしているのです。

私たちすべてがこの同じ理解と信仰を持てるように祈っています。神が生きておられることを証します。イエスはキリストであり、この教会は神の教会です。神のみ業は主の選ばれた時が至れば、世界中を満たし、人々を祝福することでしょう。□

個性豊かな姉妹たちのきずな

モニカ・フルマー姉妹がドイツで扶助協会会長の一員として責任を果たしていたとき、お休み会員のアン(仮名)と知り合いました。アンの訪問教師たちは教会へ来るように励ましましたが、彼女はかなり長い間足が遠のいていたのでなかなかその気になりませんでした。しかし、やっとのことで説得して、温かい歓迎を受けてもらうことができました。

最初アンは集会所の後ろの方に座っていましたが、ワード部の姉妹たちに受け入れられるようになるにつれ、居心地がよくなってきました。間もなく扶助協会の会長会はアンを音楽の指導をする責任に召すよう要請すべきだという気持ちを感じました。音楽についてはほとんど知識のないアンでしたが、その責任を引き受けました。扶助協会の姉妹たちの助けにより、アンは召しを果たすことを学び、さらにワード部でも指導者としての責任を受けるようになりました。やがて、アンの夫もバプテスマを受け、家族は神殿で結び固められました。

フルマー姉妹はこのように述べています。「姉妹たちのきずなについて考えると、いつもアンのことが頭に浮かびます。扶助協会の姉妹たちに愛され受け入れられることによって、彼女は自分が温かく迎えられていると感じ、さらには必要とされていることがわかるようになったのです。」

一致して仕える

予言者ジョセフ・スミスが1842年3月に扶助協会を組織したとき、最初に集まった20人の姉妹たちは同じ目的と信仰によって結ばれていましたが、生活状況はそれぞれ異なっていました。



ILLUSTRATED BY LORI ANDERSON

数人の姉妹たちは教会の指導者の妻であり、幼い子供たちがいました。ある姉妹は、店を営む教会員でない男性と結婚したばかりでした。そのほかの姉妹たちは独身でした。しかし、皆がそれぞれの能力を発揮してこの愛の奉仕を始めたのです。

1992年を迎えた現在、世界中には278万人の扶助協会の会員がいます。あらゆる地域にわたる様々な人種や文化的背景を持つ人々です。能力もそれぞれ異なっていますが、皆同じ組織の一員なのです。使徒パウロが教えているように、私たちは皆キリストの体の一つ一つの肢体です。

「ところが実際、肢体は多くあるが、からだは一つなのである。目は手にむかって、『おまえはいらない』とは言えず、また頭は足にむかって、『おまえはいらない』とも言えない。……あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である。」(Iコリント12:20-21, 27)

それぞれが異なった才能を持っていることは、互いに協力し合ううえでどのような祝福となるでしょうか。

個人を祝福する

一人一人が力を出し合うにつれ、一

致の精神が生じ、それぞれの個性を尊重するようになります。中央扶助協会会長のイレイン・L・ジャック姉妹はこのように述べています。「女性一人一人に自分に授けられている賜を尊重してほしいと思います。また、ほかの人の才能も見いだすように努めてください。互いの生活に祝福をもたらそうとするときには、相手と自分の似ているところはもちろん、異なっているところも喜んで受け入れてください。」

テネシー州キングストンのサンドラ・エドワーズ姉妹は、バプテスマを受けてから数年後に離婚し、脳卒中で母親を失い、悲惨な交通事故で息子を亡くしました。このような危機的な事態に陥った彼女にとって、唯一の心のよりどころは支部の会員たちでした。彼らは引越を手伝い、子供たちの世話をし、食事を持って行き、励ましと愛、助けを与えたのです。エドワーズ姉妹はこのように語っています。「批判的な言葉は一言も聞きませんでした。仲間外れにされたり、恥ずかしい思いや寂しい思いをしたことも一度もありませんでした。いつも必要とされ、感謝されていることがわかりました。」

七十人第一定員会会員のジョン・K・カーマック長老はこのように勧告しています。「私たちは自分と異なる人々の中であって一致するよう、熱心に努めなければなりません。……どのような場所にあっても自分と異なる人々を仲間とし、受け入れ、一致する態度を身につけましょう。私たち一人一人には、この責任を自覚する必要があります。」(「エンサイン」1991年3月号, p. 9)

一人一人を尊重していることを示すにはどうしたらよいでしょうか。□

安息日になった 日曜日

クライティー・クリーガー

教会に改宗してから、福音の原則をすっかり理解するまでに、私は多少の時間を必要としました。どうしたものか、いくつかの戒めや教義が、最初はピンと来なかったのです。たとえば、安息日を聖く保つことも、そうでした。

バプテスマを受ける以前、私は日曜日の午後には青少年を引き連れて、タッチ・フットボール(訳注——「アメリカン・フットボールの興味を失わないで、危険なく行なえるように考案された簡易ゲーム。……幼少年向き……ジュニア・フットボール」〔新修体育大辞典〕昭和61年4版、不昧堂刊、p.966)からたこあげまで、いろいろなレクリエーション活動を行なっていました。教会に入ってから、別段それを悪いこととは考えませんでした。グループの一致を促し、青少年同士の友情を深めるのにも役立つと思っていたのです。ところが、ある日曜日の午後、自分の行動について改めて考えさせられる出来事がありました。

その日、青少年グループは全員アイスホッケーがしたいと言い出したのですが、人数が足りませんでした。そのとき良いアイデアが浮かびました。ハリソン支部長の家族を誘おう。7人いる子供のうち4人はプレーができる。

それで人数が倍になるし、青少年が教会員と知り合いになるいい機会だわ。私はそう考えて、一番年上のレスに電話をかけました。彼は喜んで承諾してくれました。

ところが、子供たちがスケート靴をそろえたりジーンズの着替えを用意したりするのを待っている間に、私が支部長のお宅に入ると、どうも雰囲気がおかしいのです。ハリソン支部長はまゆをひそめているし、レスは困り果てた様子なので、深刻な話の途中だったことがわかりました。しばらくの沈黙の後、支部長は私を見ると、「子供たちに選択の自由はありますが、私としては認められません。クリーガー姉妹もきょうが日曜日なのを知っているでしょう」と穏やかに言いました。4人のうち3人がついて来ましたが、私はかなり罪悪感を覚えながらハリソン家を後にしました。

その週に教会の機関誌が届きました。中には、安息日についての記事がいくつか掲載されていました。私はこの問題に対する教会の指導者の見解が知りたかったので、機関誌を隅から隅まで読みました。そして、安息日にはならないことを念入りにリストにまとめ、何が何でも安息日を聖くしようと心に決めました。



PHOTOGRAPH BY WELDEN ANDERSEN



老人ホームにいる
ふたりの姉妹を訪問して、
私たちは日曜日を
安息日に変えることができました。
一緒に聖句を読み、賛美歌を歌い、
自分が必要とされていることを知り、
心の満ち足りたひとときを
持つことができました。

次の日曜日、今度は何をすればいいのか私はわからなくなってしまいました。律法の文字は守っていたのですが、安息日の精神がわかりませんでした。(IIコリント3:6参照)何か大切なものが欠けていたのです。先程のアイスホッケーの話があったのは、クリスマス間近のことでしたから、年が改まって1月にも何回か日曜日を過ごしましたが、どれも安息日と呼べそうにはありませんでした。

こうして2月に入ると、キースという新しい改宗者の兄弟が、私たちの小さな支部に転入してきました。教会員になって5カ月で、ほやほやの宣教師4人分の熱意をひとりですべて持っているような人でした。私たちの通っている大学で、地元の老人ホームと提携して介護プログラムを実施することが発表になったとき、私たちは学内の唯一の末日聖徒としてプログラムに参加し、模範になるべきだと、その兄弟が提案しました。私たちは、その老人ホームに住むふたりの支部の会員を訪問することについて話し合ったものです。しかし、結局は何もしませんでした。

そんなある日曜日、ハリソン支部長が信仰について話をしました。信仰とは、言葉と信念を実行に移すことだという話でした。同じ日の午後、キース

と私は、老人ホームの姉妹たちを訪問することにしました。

最初の訪問は散々でした。それぞれの姉妹と会ったのですが、平凡なあいさつを交わしただけで、それ以上のことは何もできませんでした。しかし、帰り際に私たちはふたつのことを理解しました。自分たちは必要とされていること、そして、もっといろいろなことができるということです。翌週の日曜日は地方部大会があり、240キロの道のりを車で帰ってきたのですが、それでも午後には、ハリソン家のレスと妹のルアンとポーシャにも一緒に老人ホームを訪問するように頼みました。ポーシャは看護学生でもありました。

私たちはふたりの姉妹の車いすを押して、静かな場所へ行きました。キースが教会機関誌の記事を読み、レスが聖句を読み、ポーシャが美しい祈りを捧げました。その日の経験に満足したので、次の日曜日には、ヤングアダルトと青少年を7人連れて訪問しました。ハリソン支部長の承認の下にレスとキースが聖餐を祝福し、姉妹たちにパスしました。ついで、老人ホーム内の小さなチャペルに車いすを押して行って、賛美歌を歌いました。教会の機関誌から交替で記事を朗読し、詩や聖句も読みました。その後、閉会の賛美歌を歌

い、祈りを捧げました。

帰りは午後の3時を回っていて、皆おなかすいていたので、レスの家でスープとクラッカーをごちそうになりました。日曜日の午後に支部長の家に行くのはそれが2度目でしたが、このときはアイスホッケーのメンバーを捜しに来たあの日曜日とは、まるで違っていました。私たちのうちの7人は、平日には町のそれぞれの地域で生活していて、大半は家族の中で自分だけが末日聖徒なのです。しかし、あの日曜日の午後の2時間だけは、皆でテーブルを囲み、レスの両親も交えて話に興じ、笑い、会員同志の交流が少ない地域の末日聖徒が抱える問題などについて、語り合いました。本当に胸がすくひとときでした。

ほかにいくつかの集会に出てから午後の10時に帰宅したときには、系図を調べたり宣教師に手紙を書いたりするという、予定していたことに取り組む時間は残っていませんでした。私は、その夜、ひざまずいて祈ったとき、安息日には短い1日にできると考えていたことよりずっとたくさんなすべき事柄があると気づいたのです。私たちを祝福するために特別な日を用意してくださいました天父に、心から感謝しました。□



なぜ伝道に出ることは それほど大事なのですか

私は伝道に出よう望まれていることはわかっているのですが、自分でもそう望んでいるかとなると確信がありません。伝道に行くのは良いことだと思いますが、その2年間を過ごす良い方法がほかにもあるのではないのでしょうか。なぜ伝道に出ることはそれほど大事なのですか。

本誌の答えは問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

回 答

あ あなたのワード部を見渡して、帰還宣教師で、あなたが本当に尊敬する人を見つけてください。そしてその人に、伝道がどれほどやりがいのあるものか尋ねてみてください。おそらくその人は伝道の経験には計り知れない価値があったと話してくれるでしょう。

一方、伝道に出る機会があったにもかかわらず出なかった人は、後悔の念を抱えていることがよくあります。次のように語ったある医師の例について考えてみてください。「大学時代、私は自分の使命は医者になることだと、友人に言っていました。ですから、私の級友が2年間主に仕えている間も、私は勉強し続けました。あれから30年たちましたが、今では自分の人生に対して違った考えを持っています。伝道に出た友達より2年早く人々を肉体的な苦痛から救うことができた反面、友達の人々を霊的な苦痛から救いました。私の医学的な治療の効果が続くのは数

年ですが、霊的な救いの影響は永遠にわたって続くものです。また私の医者としての仕事振りが伝道に行った友達の仕事振りより勝っているということもありません。今では、自分が近視眼的で自分勝手であったと思っています。」

しかし、伝道に出ることには、ただ後悔しないためというより、もっとすばらしい理由があります。天父は皆さん一人一人に人生のうち2年間を天父に捧げ、1日のすべての時間を奉仕の業に捧げるよう招いていらっしゃいます。なんとすばらしい機会でしょう。あなたが天父をどれほど愛しているかを示すうえで、これ以上良い方法があるのでしょうか。もしあなたがその機会を退けたら天父に何と申し開きができるのでしょうか。

そして、あなたは伝道により成長することができます。伝道で学ぶ経験はほかの方法では得ることのできないものです。もしあなたが誠心誠意で伝道

の業に励めば、奉仕を通して自分を格段と成長させて帰って来られます。良い対人関係を築く方法やあなたの生活に福音の原則を応用する方法について非常に貴重なことを学べます。聖典や教会の教義をさらに深く理解し、とりわけ愛について学んでください。

主が地上におられた間にされた方法で、つまり世の人々が聞くことのできる一番重要なメッセージを教えるという方法で、あなたも救い主と同じような愛をもって愛することを学んでください。あなたは救い主をさらに深く理解し、救い主の使命に深い思いを寄せるようになります。そして家族や友達をもっと愛するようになります。なぜなら主の模範に従うことにより、主があなたの家族や友達を見ておられるのと同じ気持ちで彼らを見られるようになるからです。

もちろんあなたの伝道は、啓示や霊的経験の輝かしい出来事ばかりが続くわけではありません。伝道という仕事は、あなたの今までの人生で一番困難なものかもしれません。しかし、試練の中にあっても達成感を見いだし、天父に次のように言うこともできます。「私は主のためならばこの試練に必ず堪え忍びます。」伝道はあなたに霊的な自信をもたらし、永遠に続く天父とのぎずなを形作る助けとなるでしょう。

人々を助けるために捧げる2年間の経験から得られる喜びを考えてみてください。真理に飢え渴いている何十億という人々がいます。彼らの人生をより満ち足りた完全なものとするために、

神のみ手に使われて働くことができるのです。イエス・キリストの福音があなたの生活にもたらしたすべての祝福を考えてみてください。この地球にいる兄弟姉妹たちに、このような祝福もなしに暗やみの人生を歩ませたいと思うのでしょうか。

確かにこの2年を使えばほかにもたくさん良いことができるでしょう。学校に行ったり、働いてお金を稼いだり、結婚して家庭を築くこともできます。しかし、主があなたに望まれていることを後回しにして、ほかのことを優先させたなら、あなたは主に何と申し開きができるでしょう。それにこのような事柄は、あなたが伝道から帰ってからも遅すぎることはありません。天父はあなたが伝道に出て神に仕えている間に、そういう機会を取り去られたりするのでしょうか。

さて、健康そのほかの理由で伝道に出られない多くの人があります。年を取ってから教会に入り、伝道の機会がなかった人もいます。主はその人たちについても明らかにしておられます。彼らがどのような形で主に仕えようと、主は喜んで受け入れてくださいます。もし彼らが主と共に働けば、伝道に出なかったために経験できなかった事柄を学べるよう助けてくださいます。

しかし、あなたが伝道に出られる状態にあるなら、主に対して心を尽くし、勢力を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして2年間を過ごしても後悔することはないでしょう。あなたがそれを実際に体験するまでは「汝らの喜び如何ばかりぞや」(教義と聖約18:10-17参照)という聖句の真の意味を想像することさえむずかしいのではないのでしょうか。

青少年の意見

もしあなたが伝道に行くのは良いことだとわかっているのなら、監督や支部長に助けを求めてください。なすべきことを行なえるように天父の導きを求めて祈ってください。天父はあなたの祈りにこたえてくださるでしょう。



アリー・
スウェービー
(16歳)
ジャマイカ、
マンチェスター

あなたの気持ちに従い、天父に祈り、監督と話し、指導者の言葉に耳を傾けて良いアドバイスを受けてください。アイリーン・マメア(19歳)
アメリカ領サモア、バゴバゴ

あなたの質問を読んで私は悩みました。あなたの気持ちがわかりすぎるほどわかるからです。私も望みどおりの人生を歩み、結婚し、学校に行き、自立したかったからです。事実、私の人生のすべての計画は伝道に出ることと逆の方向を向いていました。しかし、今私はとても謙遜さを要求される状況で働いています。これまでの私の伝道は必ずしも楽しい経験ばかりではありませんでした。実際、かなりの努力をしてからでないとすばらしい経験などできません。しかし、私は伝道の業に携わる召しを受けたことにとっても感謝

しています。私はこの世的な娯楽がないことを寂しく思うことはありません。そういったものは、伝道から戻ってから楽しめばいいと思うからです。しかし、主に仕える伝道を終えた後でなら、あなたはこの世的な楽しみが以前より小さなものを感じられるでしょう。



ウィリアム・
ボズリー Jr. 長老
(20歳)
フィリピン、
イラガン伝道部

私は何人かの帰還宣教師が次のように言っていたのを覚えています。「伝道に行きなさい。きっと大好きになるでしょう。」私は冗談半分に「もちろん出ますとも」と思ったものでした。しかし、その後とにかく伝道の召しを受けました。どうなったと思いますか。本当に伝道が大好きになりました。福音を伝えたことを感謝され、人々の生活が良い方向に変わるのを目にするにつれ、伝道の大切さを感じます。



ウェーン・
シュロツサー III
長老(21歳)
ペンシルベニア、
ピッツバーグ
伝道部

伝道に出ることは非常に重要だと思っています。私の知っている宣教師は皆、自分の伝道の経験をとても大切にしています。何に代えてもその機会は逃さ

なかったらと言っています。彼らはすばらしい人々に出会い、証を強め、楽しい経験をたくさんしてきました。伝道はさらに福音に沿った生活をするまたとない手段であるばかりでなく、天父に感謝の気持ちを伝える最高の方法でもあるのです。



エリザベス・モイル(16歳)
ニュージーランド、
ダニジン

私は小さいとき自分の父から何の訓練も受けませんでした。伝道に出て私が必要としていたすべての訓練を天父から受けることができました。伝道によって私の生活は変わりました。



オハ Jewel 長老
(22歳)
ナイジェリア、
アバ

私は高校を卒業し、ラジオ局でディスクジョッキーとして働き始めました。お金を稼ぎ、放送関係の仕事で貴重な経験を積んでいくにつれて、伝道に出たいという気持ちはどんどん心の隅に追いやられてしまいました。しかし真剣に考えた結果、伝道の召しを受けることにしました。すばらしい伝道でした。人生のいくつかの事柄は私たちが考えているほど大切でないことがわか

るようになりました。帰還後、伝道に出る前に働いていたラジオ局から電話があり、復職する意志があるか尋ねられました。私は局に戻り、以前から希望していたスポーツ部門を担当するというすばらしい機会に恵まれました。

自分の目標を追求するために、あつとき伝道に出ていなかったらと思うと身震いがします。あなたが主のみ業を優先するなら、人生を歩むうえで主はあなたに祝福を与えてくださるでしょう。



スコット・C・ミラー(23歳)
ユタ州、
バウンテフル

2年間あなたがほかに何を行なったとしても、伝道に出るほどには幸せな気持ちを味わったり、多くを学んだりすることはできないでしょう。この伝道地でしばらく生活し、専任宣教師たちと共に親しく奉仕してみると、心からそう言えます。伝道に出るのは、そう望まれているからではなく、特権と祝福だからだと考えるべきです。



カミー・ヘンダーソン
(20歳)
日本、
沖繩

福音を分かち合うとはどういうことかを経験する最良の方法は、伝道に出ることだと思います。



ショーン・ニープ
(15歳)
オーストラリア、
クイーンズランド
州、キャパラバ

皆さんも下記の質問に答えて、この質疑応答を有益なものにしてください。1992年7月1日までに、回答を郵送してください。あて先は次のとおりです。
QUESTIONS AND ANSWERS
International Magazines
50 East North Temple
Salt Lake City, Utah, 84150, U.S.A.

氏名、年齢、住所、所属ステーク部、ワード部名を明記してください。母国語で書いても構いません。こちらで翻訳いたします。手書きでもタイプでも結構です。できれば写真を同封してください。ただし返却はいたしません。回答が非常に個人的なものである場合には匿名にすることもできます。また、すべての回答が採用されるとは限りませんのでご了承ください。

質問——私たちの家庭は、家庭の名に程遠いように思われます。ただ食べて寝るだけの場所です。私たちはよく言い争いをしますし、皆好き勝手なことをしています。私たちのような家族が一致するにはどうすればいいでしょうか。□

ウイスイット・ カナカーン

デビッド・ミッチェル

礼 拝堂に日の光がさし込んでいます。最後列の席の後ろで、床にしゃがみ込んだ男性が、赤ちゃんにミルクを飲ませています。楽しそうにしていますが自分の赤ちゃんではありません。ある母親から預ってきたのです。母親は福音の教義クラスのレッスンに集中でき、彼も赤ん坊を抱いてあやす楽しみを味わうことができたのです。

この男性は、タイのチアンマイ地方部の地方部長、ウイスイット・カナカーン兄弟です。やさしく赤ちゃんの世話をする彼の姿には、自分の管理する3つの支部に集う500人の会員たちに注いでいる愛情がよく表われています。

会員たちは、カナカーン地方部長がみずから教える福音の原則を実践していることをよく知っています。その前の日、彼は自宅でこのように言っていました。「私たち家族が教会に活発に集えるのも、福音を実践しているおかげです。ただ祈ったり、聖典を勉強したり、教会で責任を果たすだけでなく、毎日の生活にすべての福音の原則を取り入れているのです。」

たとえば教会では、母親と父親、子供たちが互いに助け合う大切さなど、家庭で愛と一致をはぐくむ方法を教わります。きょうの午後、妻は仕事に出かけなくてはなりませんでしたが、私も午前中に仕事があったのですが、午後には帰ってきて、ふたりの子供の世話をし、洗濯や食器洗いをしました。」

カナカーン兄弟が話していると、7歳になる娘のウイスチャラク(ニックネームはブアン)が、昼寝から目覚めて、眠そうな表情で部屋に入ってきました。そして、父親が忙しいことを知ると、テレビをつけました。子供向けの番組を選んだのですが、その漫画には、恐ろしい場面がありました。すると父親は、歩いて行って娘の肩に腕を回し、それがふさわしくない番組であることをやさしく説明しました。そして、外へ行って8歳になる兄のウイスティポーン(ニックネームはベン)と一緒に遊ぶように、うまく言い聞かせました。「モルモン経のベンジャミン王から取って、ベンと呼んでいるんです」と彼は説明してくれました。

「家庭で行なうべきことはたくさんあります。家族と一緒に活動することにより、証が築かれ、霊的に強められます。たとえば、妻は家庭で栽培したオレンジやマンゴを瓶詰にするのがとても上手なのですが、子供たちにも果物集めや貯蔵の準備を手伝わせています。また、個人の日記や家族歴史など、家族の記録の作業も一緒に行なっています。」

共に教師として働いているカナカーン兄弟姉妹は、家族で祈り、自分たちの手で訓練を施すことによって、学習機能に障害があると言われていた息子

カナカーン兄弟姉妹と息子のウイスティポーン(左)、娘のウイスチャラク





を回復させました。「学校の先生たちから理解力がかなり劣っていると言われていたので、最初息子に家庭教師をつけようと考えました。しかし、その問題について祈ると、息子にとっての一番の教師は、母親であり、父親であることに気づいたのです。祈りの答えに従った私たちの決断は、とても良い結果をもたらしました。ベンは、自分の父親と母親が、自分の必要を理解し、助けようとしてくれることに、とても満足そうでした。私たちが学校の勉強を手伝うことによって、ベンは次第に進歩し、理解力を増しています。そしてこのことは、家族が一致する機会ともなっています。」

現在の家族の親密さとは対照的に、1981年に結婚した当初のカナカーン兄弟姉妹は、仕事の関係でどうしても離れ離れに生活しなければなりません。「結婚して1カ後に、東京神殿で結び固めを受けました。帰国すると、私は給料のいい教師の仕事があったので、チアンマイに戻り、妻はそこから830キロも離れたマハーサーラカームの実家へ帰ったのです。そのようにして、1年ほどが過ぎましたが、宣教師たちはいつも私にこう尋ねてきました。「ウスイット兄弟、神殿で交わした誓約を守るならば、主が祝福を与えてくださるといふ信仰がありますか。姉妹と一緒に暮らすべきですよ。」

それで私は、チアンマイでの仕事を辞めて、マハーサーラカームで別の仕事を見つけました。収入はチアンマイの仕事の半分以下でしたが、そのときに家庭の中に福祉の原則を取り入れることを学んだのです。収入の範囲内で予算を立てること、自らの手を使って働くこと、そして福音の中で家族を養うことを学びました。

私は、マハーサーラカーム支部の支部長に召され、妻は扶助協会の会長に召されました。支部の中で、男性会員は私だけだったのです。会員数が増えるまでには、2年くらいかかりました。今では、支部の教会堂が建っています。私たちが何かしたからではなく、支部の人々に愛と一致があったからなのです。」

マハーサーラカームに来る前、カナカーン兄弟はチアンマイ地方部の地方部長をしていました。そして、3年前にチアンマイの高校で教鞭をとるために戻ってきたときも、同じ召しを受けました。

カナカーン家族は、チアンマイ市の郊外に家を構え、果物畑や1ヘクタール余りの水田を持っています。「何人かの人を雇って稲を育て、収穫したら母にあげるのです。」

カナカーン兄弟と母親との関係は、20年前に初めて末日聖徒の宣教師に会ったときと比べると、はるかに良くな

りました。

カナカーン兄弟は、最初友達から宣教師たちの英会話クラスに誘われました。やがて福音を学ぶようになり、教会にも誘われました。

「私は、求道者クラスに出席しましたが、初めは何もわかりませんでした。私を含めて家族全員が熱心な信徒だったからです。しかし、イエスの名前は私の心に残りました。幼いころ、プロテスタントの宣教師たちが、イエスやキリスト教について話していたのを覚えています。私の両親や親戚は、キリスト教徒が好きではなく、彼らやイエスの悪口を言いました。私は、このイエスという人物について考えずにはいられませんでした。イエスの身に一体何が起こったのか、なぜ私の家族は、そんなにイエスのことを悪く言ってばかりいるのか、と思ったのです。」

このようなわけで私は、宣教師たちがイエスについて話すのを聞いたとき、学校に通う間住まわせてもらっていた、いとこの家に彼らを招待しようと決心しました。私のいとこは、家族と共に何度か宣教師から福音を学びましたが、しばらくしてやめてしまいました。

私は福音を学び続け、教会に出席しているうちに、ついに証を得、18歳でバプテスマを受けました。

バプテスマを受けたことを話すと、母はすっかり動転してしまい、私は家族ののけ者にされてしまいました。3人の姉とひとりの兄がいる家族の末っ子だった私は、それから家族の迫害に苦しみ、ついに家を出ました。

私の事情を知っていた当時の支部長

は、私に賢明な勧告を与えてくれました。もし神様を愛するならば、戒めに従い、両親に愛と尊敬を示したいと感じるはずだと言うのです。そして、私が家に帰り、家族に対してクリスチャンとしての良い模範を示すならば、主は私を祝福して下さるだろうと言いました。

家に帰ると、母は私に言いました。『何が欲しいの。マットレス、それともまくら。何を持って行ってもいいけど、ここにいることは許しませんよ。』

しかし私は、両親や兄、姉たちを愛していること、そして一緒に住みたいことを伝えました。家族の者は皆、非常に取り乱して口も利いてくれませんでした。そんな中でも学校に行くとき以外は、家の中や田畑でできる限りのことをして働きました。

高校を卒業すると、私は大学に進みたいと思いました。母はこう言いました。『自分はモルモンじゃないと言ってごらん。そうしたら大学に行かせてあげるわ。でもモルモンだと言い張るのなら、学校には行かせませんからね。』『お母さん、ぼくはモルモンなんです。』『よくわかったわ。』

私は入学試験さえ受けられませんでした。」

カナカーン兄弟は、大学に行く代わりに、チアンマイの英語学校で勉強することになり、やがてタイで研究活動をしているアメリカ人の大学教授の下で働く機会に恵まれました。後に彼は、母親の許しを得てバンコクの大学で約4年間学ぶことができました。

「父が亡くなったのもちょうどその

ころです。大学での生活は私にとって良い経験となりました。大学での活動が、教会に出席する妨げにならないように、いつも気をつけました。また、友達から伝道に出るように強く勧められました。自分が宣教師になることについては証がなかったのですが、私もほかの人にはそう勧めていました。

大学を卒業してから、お金を稼ぐために公立学校でしばらく教え、その後伝道に出ようと決心しました。母に話すと、非常に腹を立てました。そして弁護士に連絡して、私の遺産相続権を破棄してしまいました。そのとき母はこう言いました。『家族か、教会か、大事な方を選びなさい。』私は、主のために伝道に出たいと母に言いました。すると、母は言いました。『じゃあ、好きにきなさい。ただし、家族からの援助は一切ありませんよ。』

カナカーン兄弟は、タイのバンコク伝道部で働き、多くの良い経験をしました。そのうちのひとつは、彼の母親と姉に関する経験でした。ふたりがバンコクを訪れていたときのことです。カナカーン兄弟は、七十人のヤコブ・ディヤガー長老のファイヤサイドにふたりを招待しました。

「私は通訳を頼まれました。そして、ディヤガー長老と一緒にひざまずいて家族のために祈りました。それからお話の中でディヤガー長老は、私の家族に対して賛辞を述べたのです。母に目をやると、泣いていました。私が教会に入ることに反対するあまり、銃で撃とうとした姉までが、涙を流していました。ファイヤサイドの後で母は、何

か伝道中に援助できることがあったら知らせるように、と言ってくれました。その日、母は確かにみたまを感じていたのです。

今私は、家族とよい関係を築いています。私と妻、子供たちを愛してくれているのです。母は今、私たちの近くの家に住んでいます。」

伝道中にカナカーン兄弟は、新しく召されたばかりの姉妹宣教師、スママーン・シーサラカーム姉妹と初めて出会いました。そして伝道から帰って3年後に、共通の友人を通して再び連絡を取り、文通を始めました。ふたりで結婚について考え始めたとき、シーサラカーム姉妹は、導きを求めて祈りました。そのとき、救い主の手が頭の上に置かれ、結婚して家族を持つという決心が正しいという確認を受けたように感じました。

現在、カナカーン姉妹は、地方部の扶助協会会長として、またチアンマイ支部の初等協会教師として働いています。

「家庭での行ないこそが自分自身や、良い影響を与えようとする周りの人々にとって最も大切なのです」とカナカーン兄弟は言っています。「たとえば、近所に住むある夫婦は、宣教師から福音を学んでおり、さらに私たちが教会へ行くとき息子さんを私たちに託してくれています。これは、私たち家族に好感を持ってくれているからなのです。私たちは家族として、また末日聖徒として、どこにあっても福音の実践を通して、全き者となることができます。」□



「これらの 最も小さい者 のひとりに…」

キャロリン・セッションズ・アレン

南 カリフォルニアの若者のほとんどがビーチで体を焼いて楽しんでいる間のことでした。カリフォルニア・グレンドラステーク部の青少年は、荒れた手と痛む足、筋肉痛に耐えながら、ロサンゼルスを中心部にあるホームレスの人々の施設で奉仕して春休みを過ごしました。

彼らにとって、この経験は何にも代え難いものになりました。「施設で奉仕したことは、ユースカンファレンスの中で最も素晴らしい経験でした。」17歳のヘス・ハミルトンはこう語ります。

最初は、疑問を持つ青少年もいました。アロン神権の祭司の職にあるクリス・ウォーカーはこう言っています。「みんな、山とか、そ

PHOTOGRAPHY BY CAROLYN SESSIONS ALLEN



「これらの 最も小さい者 のひとりに…」

キャロリン・セッションズ・アレン

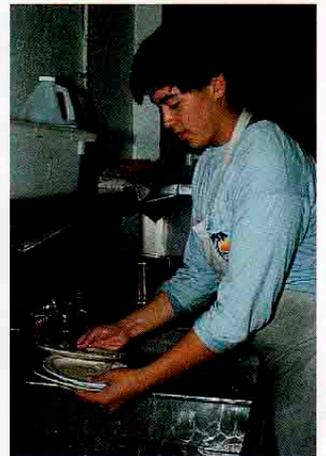
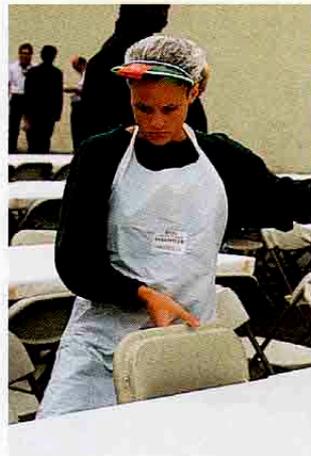
南 カリフォルニアの若者のほとんどがビーチで体を焼いて楽しんでいる間のことでした。カリフォルニア・グレンドラステーク部の青少年は、荒れた手と痛む足、筋肉痛に耐えながら、ロサンゼルスを中心部にあるホームレスの人々の施設で奉仕して春休みを過ごしました。

彼らにとって、この経験は何にも代え難いものになりました。「施設で奉仕したことは、ユースカンファレンスの中で最もすばらしい経験でした。」17歳のヘス・ハミルトンはこう語ります。

最初は、疑問を持つ青少年もいました。アロン神権の祭司の職にあるクリス・ウォーカーはこう言っています。「みんな、山とか、そ

PHOTOGRAPHY BY CAROLYN SESSIONS ALLEN





ういう所に行かなければユースカンファレンスにならないんじゃないかと思っていました。でもホームレスの施設に行った人はみんな、自分ではなくほかの人を助けること、それが福音なんだとわかりました。モーサヤ書第2章17節に書かれている『お前たちが同胞のために務めるのは、ただお前たちの神のために務めるのである』という言葉が本当に心に響きました。』

教師の職にあるジェレミー・ベアードはこう語ります。「ぼくは、このユースカンファレンスはあまりおもしろくならないだろうと思っていました。でも、学ぶことの多いすばらしい経験となりました。このホームレスの人たちの施設で、ある男の人と話しました。その人は以前ビジネスで大きな成功を収めたのに、麻薬のために今は家も家族も失ってしまったそうです。自分が今までホームレスの人々に対して抱いていた思いが間違っていたことに気づきました。」

施設が街のあまり好ましくない地域にあることから、訪問を多少心配する声も聞かれました。若い女性のマイアメイドのキャロライン・ジェームズは、こう語っています。「初めて施設に着いたとき、みんな車の外に出るのを怖がっていました。でも中に入ってみると、いろいろな人と教会について話すことができ、良い経験になりました。」

肉体にも霊にも栄養を与える

青少年は、12人で1組となり、1日2回3時間交替で、ロサンゼルスにあるホームレスの人々の施設を訪れました。そこで昼食と夕食を600人近いホームレスの人々に給仕するのです。また、衣類を仕分けしたり、復活祭の

食事の準備を手伝ったりもしました。

それに加えて青少年は、復活祭のプレゼント袋150人分に歯ブラシ、歯磨き、せっけんなどの衛生用品を詰めました。各ワード部や、公共施設には寄付を受け付ける箱を設置しました。子供たちのために、キャンディーやかわいいぬいぐるみも一緒に詰め、日曜日の午後にプレゼントしました。

日曜日には、監督の青少年委員会と指導者が2組に分かれて、地元からロサンゼルス市の繁華街まで40キロの道のりを車で往復し、皆が教会の集会に出られるようにしました。こうして建物の近くにテーブルを並べ、早朝の食事と、午後の伝統的な復活祭の料理をそれぞれ2,500人分近く出すことができました。

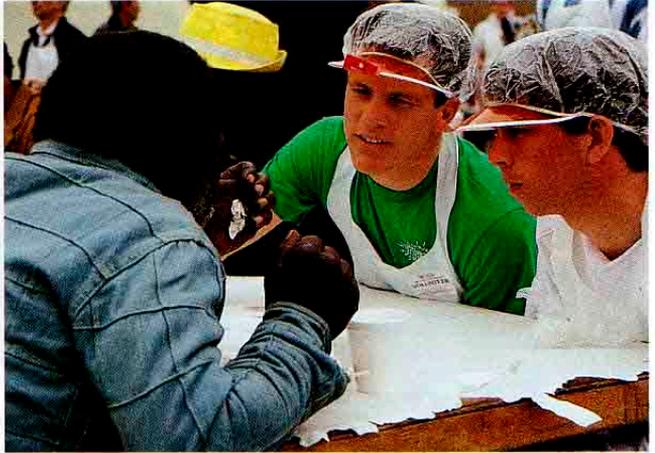
食事がほとんど終わったとき、青少年は歌を頼まれました。「共に愛し合え」と「神の子です」の2曲は、そこにいたすべての人々の涙を誘いました。

17歳のハーリー・ウィリアムズはこう言っています。「施設にいるすべてのホームレスの人々は、ぼくたちが給仕した食べ物だけでなく、何かを求めています。彼らに必要なのは福音なのです。」

日曜日の食事を給仕した後、青少年の多くはホームレスの人々の傍らに座って話しかけました。ある男性と聖書の原則について話し合ったジェフ・フラーは次のように言っています。「このことは、ぼくの人生の中で確かに一番すばらしい経験でした。彼らはみんな神の子なのです。彼らはぼくに、自分たちがどのようにホームレスになったかを話してくれ、誤った道から遠ざかるようにという貴重な助言を与えてくれました。」

もちろん、ユースカンファレンスでは、監督の準備した朝食や、セミナー、ゲーム、ダンスなど、通常の活動

24人の若人がロサンゼルスにあるホームレスの人々の施設を訪問し、600人近い人々に食事を給仕しました。また衣類を仕分けしたり、復活祭のための食事の準備を手伝いました。



も行なわれました。しかし、カンファレンスの最後に開かれたファイヤサイドでは、証をした人のほとんどが、今回の奉仕活動と、それが若人の人生に与えた影響について触れていました。

今までで最高のカンファレンスでした

「最初は、施設に行くことに対して否定的な人もいました。しかし今では、助けを必要としている人々に対する態度が目に見えて変わったのがわかります。私が今まで参加した中で最も得るところの多いカンファレンスになりました。」カンファレンスの委員長を務めた17歳のリサ・サマーヘイズはそう語りました。

もうひとりの委員長であるジャスティン・ベックはこう言います。「確かに施設にいるのは、何かしら問題のある人々なのでしょう。しかし、ぼくたちは彼らのことをもっと理解しようと努めるべきだと思います。天のお父様は彼ら一人一人を愛しておられるのですから。」

17歳のベッキー・パターソンもうなずきながら語ってくれました。「今週私が学んだことは、すべての人が同じくらい大切な存在だということです。だれであろうと、どこに住んでいようと関係なく、天のお父様は愛しておられるのです。」

ステーキ部若い女性会長会第二副会長であるアーニタス・レイモンド姉妹はこう語ります。「私たちは、愛と一致を深めること、そして人に仕えなければならないことを学びました。これが一番大きな収穫でした。奉仕が^{かぎ}鍵でした。若人は、『これらの最も小さい者のひとりに』(マタイ25:40)奉仕することの意味をじかに学んだのです。」□



世界を駆ける家族

オーストラリア、ブラジル、カナダ、チェコスロバキア、イングランド、スコットランド、ジブラルタル、^{ホンコン}香港、日本、そしてケニヤ、これらの地域に関係しているものといえましょうか。

それは、イエス・キリストの教会とゴードンズミス家族です。ゴードンズミス家には、サイモン・ゴードンズミス兄弟と妻のロスティアー姉妹、それにデビッド(14歳)、ジョージ(13歳)、リチャード(12歳)、ヘンリー(5歳)の4人の子供たちがいます。

国際的なチームとも言えるこの家族は、現在東京に住んでいます。ゴードンズミス兄弟の勤務する会社が東京にあるからです。現在の仕事に就く前、彼は教会のアジア地域管理本部で総合施設課課長として働いていました。

ゴードンズミス姉妹の話聞いてみましょう。「主人の父親はオーストラリアで生まれました。母親はジブラルタル生まれです。主人が生まれたのは、両親が外交団の仕事でケニヤに在住していたときのことです。私自身はチェコスロバキア生まれです。長男はブラジルで、次男と三男はイングランドで生まれました。そして末の子は香港生まれです。ある意味で私たちは、教会という国際的な家族を代表していると言えるかもしれません。」

世界を駆け巡ってきたゴードンズミス家族の物語は、20年以上も前、チェコスロバキアのプラハで始まりました。当時、プラハの大学に通う18歳のロスティアーは、母国の将来にあまり希望を持っていませんでした。両親は離婚しており、母親はオーストリアへ亡命し、父親は刑務所で服役中という状態でした。父親が釈放されるとすぐに、彼女はこう言いました。「私はもうチェコスロバキアでの生活に耐えられないの。」その理由を彼女は、「自

ゴードンズミス夫妻と子供たち。左からデビッド(14歳)、ジョージ(13歳)、ヘンリー(5歳)、リチャード(12歳)。東京の自宅近くにある駒場公園で。

由というものをかいま見たからです」と説明しています。その「自由」とは、同世代の仲間たちと一緒に学生デモに参加した際に味わったものでした。このとき彼らは、様々な妨害を受けながらも、自由と平等という理想の下に生活したいと決意したのでした。

やがてロスティアーは、英語の勉強をするという名目で、イギリスへ出国するためのビザを取得しました。当時のことを思い出して、ロスティアーはこう語っています。「私にとっては、寂しく孤独な時期でした。ロンドンに到着したころには、英語も話せず、持ち物といえば、スーツケースがひとつと、米ドルで5ドルだけでした。」チェコスロバキアにいる間に、ロンドンに住むイギリス人の家庭で、メイドとして働くという打ち合わせができていました。しかし、その家族の下で暮らして1年ほどたつと、自分には生涯のうちにもっとやりたいことがあるはずだ、と思うようになりました。

ロスティアーは友人から勧められて、ロンドン大学に入学しました。「学資を捻出するために、朝は5時から10時まで駅で新聞を売り、昼から講義に出席すると、また6時から11時まで働きました。それから自分の屋根裏部屋へ帰って勉強し、その後ようやく眠ったものです。」

2年後にロスティアーは、やはり当時学生であったサイモンに出会いました。サイモンがロスティアーにプロポーズをしたのは、その1週間後のことです。最初、ロスティアーはためらいました。「私はちゃんとした仕事に就きたいし、結婚にも子供にも関心はない、と答えたのです。しかし彼はあきらめませんでした。」こうして、ふたりは1年半後に結婚しました。同じ年、サイモンは土木工学、ロスティアーは東欧学の、それぞれ学位を取得して一緒に卒業しました。サイモンの最初の職場はスコットランドでした。

2年後、サイモンは仕事から家に帰ると、ロスティアーに、「会社からブラジルへ赴任するように言われたんだが構わないかい」と尋ねました。「いつ出発するの」とロスティアーは聞きました。



前ページ左——香港の自宅で過ごすゴードンスミス家族。
右——ゴードンスミス家の子供たちはいろいろなスポーツを楽しんでいる。サッカーもそのひとつである。
下——家族一人一人が支え合っていることを象徴的に表わしているような家族のピラミッド。

サイモンは答えました。「明日なんだ。」ふたりはすぐにブラジルのサントスへ引っ越し、サイモンはそこで海ぞいの石油パイプラインでの仕事に取りかかりました。ふたりは自分たちの人生が何か新しい節目に差しかったような気がしていました。しかし、本当の意味で人生の変化が訪れたのはもう少し後のことだったのです。

この若い夫婦は、現地の外国人クラブに入会しました。そこでロスティアは、積極的で友好的なある女性のグループに魅力を感じました。ロスティアがその会合で自己紹介をすると、ひとりの女性がこう言いました。「『ゴードンスミス』という名前は英語的だけど、『ロスティア』は随分珍しい名前ね。」「だって、私はチェコ人ですもの」とロスティアは答えました。すると驚いたことに、その女性はチェコ語で返事をしてきました。これが、チェコ生まれでブラジル育ち、そしてアメリカ人のドン・クラークと結婚しているザザとの初めての出会いでした。

クラーク家族とゴードンスミス家族はすぐに意気投合しました。一緒に映画を見に行ったり、テニスをしたり、お互いに家を訪ね合ったりしました。そんなある日、ロスティアがクラーク家にいると、ふたりの末日聖徒の宣教師が訪ねてきました。ロスティアはそのときのことを、こう語っています。「ふたりが宣教師だとは知りませんでした。髪を短く刈り上げ、ワイシャツとネクタイで正装したふたりの青年くらいにしか思わなかったのです。私はふたりにどこの会社で働いているのかと尋ねました。というのは、この国で外国人といえばどこかの会社に雇われている人しかいないと考えていたからです。それに対するふたりの答えは何だかよくわかりませんでした。自分たちは教会のために働いていて、人々を訪ね、その家庭と一緒に聖典を読んだりするのが仕事だと言うのです。それを聞いて、私は随分変わった青年たちだと思ったものです。」

共に教会員だったクラーク夫妻は、その後ゴードンスミス夫妻に、福音について話すようになりました。しばらくして、教会の集会にも誘われました。それはちょうど断食証会の日でした。そのときのことをロスティアは

次のように語っています。「私にとっては衝撃的な体験でした。周囲を見渡せば、男性も女性も、それに子供たちまで、皆涙を流しているではありませんか。私はひどく当惑してしまいました。主人も同じ思いでした。ドン・クラークから集会の感想を求められたとき、私は彼に顔を向けて、『一種の集団ヒステリーじゃないかしら』と言ったほどです。」

それからしばらくして、ふたりはサンパウロで開かれた地域大会に誘われました。この大会で、スペンサー・W・キンボール大管長からブラジルでの神殿建設の発表がありました。ロスティアは、その場に集まった人々が予言者に対して心からの愛を示す様子に感動しました。そして大会終了後、ゴードンスミス夫妻は宣教師から福音を学ぶことに同意したのです。

順調に進んだ宣教師との集会に変化が起こったのは、悔い改めのレッスンのときでした。「私は自分の行動を何でも正当化していました。しかし、どういうわけか、悔い改めの過程に関しては、とても理にかなっていません」とロスティアは言っています。彼女は悔い改めについて真剣に考えました。そして反目していた人々に仲直りの手紙を書いたりしました。「でも宣教師から『悔い改めの原則について祈ってください』と言われてきたときには、『私は神の存在を信じていないのに、どうして祈ることができるのでしょうか』と答えました。すると宣教師は、『10階に人が住んでいるかどうかは、ドアをノックしてみるまでわからないでしょう。だから、ドアをノックしてみて、だれか答えてくれる人がいるかどうか、確かめてください』と言うのです。」

ある日、私は台所で皿を洗いながら、その宣教師の言葉について考えていました。そして宣教師の言葉に従ってみようと決心しました。私はひざまずいて、『天のお父様』と呼びかけました。すると、心の中に温かいものが込み上げてきました。私はもう1度、『天のお父様』と呼びかけました。心が一段と熱くなりました。あれほど自分が愛され、守られているという思いに包まれたのは、生涯で初めてのことでした。私はあらゆる疑問を投げかけました。『この教会は真実の教会ですか。』『ジョ

香港に住んでいたとき、13歳のデビッド・ゴードンズミスは地元のサッカーチームで活躍していた。チームのコーチは父親のサイモンであった。サイモンは、現在ワード部の伝道主任および初等協会教師として働いており、家族で東京へ引っ越すまでは、香港アイランドステーク部ビクトリアワード部の監督会の一員として働いていた。

セフ・スミスは予言者ですか。』『モルモン経は真実ですか。』『あなたは私を愛してくださっているのですか。』こうした私の質問は、みたまの力によってことごとく答えられました。

私はすぐにザザに電話をして、こう叫びました。『やったわ、やっとわかったわ。』すると、ザザは驚いて『何がわかったって言うの』と聞き返してきました。私は『証が得られたのよ』と大声で言いました。』

ロスティーアとサイモンのふたりは、ステーク部大会の後にバプテスマを受ける計画を立てました。この大会の席上、十二使徒定員会のジェームズ・E・ファウスト長老は、聴衆の中から何人か教会員を指名して、証を述べるように言いました。このとき、ファウスト長老はロスティーアも壇上に招きました。彼女は英語で証を述べ、それをドン・クラークがポルトガル語に通訳しました。証を終えると、彼女のほほに涙が伝っていました。「証が終わって、私が『アーメン』と言うと、ドン・クラークは私の顔を見てほほえみながら、『わからないなあ。一体この集団ヒステリーはどうしたことだい』と言って、からかいました。』

ゴードンズミス夫妻は、ブラジルにいた間に、友人のリチャード・ハードウィックと妻のサリーに教会を紹介しました。リチャードが大けがをして手術を受けなければならなくなったとき、ふたりはサリーに付き添って病院まで行きました。ロスティーアが、「サイモン、あなたがリチャードに祝福をしてあげられないかしら」と言うと、サリーが「祝福って何なの」と尋ねました。祝福が施され、約束が実現しました。そしてハードウィック夫妻も教会に加入しました。

ゴードンズミス家族は、ブラジルからカナダのブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバーに引っ越しました。サイモンはこの地でも、パイプラインの仕事に携わりました。そして1985年にその工事が終わったとき、サイモンにはまた別の道が備えられました。それは、家族と共に香港へ引っ越し、そこで教会のために働くことでした。サイモンはアジア地域の教会堂建築を管理することになったのです。担当地域は、香港、タイからインド

ネシア、シンガポール、マレーシアに及び、さらに日本と韓国での建築の管理にも協力しました。

この間に、チェコスロバキアで政変が起こり、そのおかげでロスティーアは22年振りに帰国できることになりました。ロスティーアはそれについてこう語っています。「今の気持ちをどう表現したらよいかわかりません。でも、自由と新たな知識という新しい波が押し寄せてきている今、母国の人々の生活に福音が浸透し、やがて本当の自由を獲得する日が来ると確信しています。」

4人の息子たちはというと、そろって旅行が大好きで、どこへ行ってもうまく適応しています。ロスティーアは自分の子供たちを「国際人」と呼んでいます。「ほかの民族や文化、信仰に接するとき、子供たちなりに、それを前向きに受け入れようと努力していることがわかりました」と、ロスティーアは言っています。デビッドは歌とピアノが上手です。また、サッカーと水泳も大好きです。将来は弁護士か実業家になりたいと思っています。証会になると、ほとんど毎回、福音についての証をしてくれます。ジョージも歌とピアノが上手です。また体操の選手でもあります。いつか医者になりたいと思っています。またチェコスロバキアで伝道したいと考えています。彼はモルモン経を読んで祈りを捧げ、自分で福音についての証を得ました。リチャードは絵がうまく、数学の才能にも秀でています。リチャードもピアノを弾き、また体操選手として活躍しています。大きくなったら建築家になりたいと思っています。ヘンリーと一緒に遊んでくれるお兄さんたちのすることを見て、何でもまねようとしています。

ロスティーアは、世界中で過ごした様々な経験のおかげで、家族が皆、自分が何者であるのかより深く理解できるようになった、と言っています。「私は、息子たちを育てるに当たって、人は皆平等なんだという考え方を基本にしています。性別も国籍も問題ではないと固く信じています。世界は本当に小さいのだから、愛と福音さえあればあらゆる悪に打ち勝つことができると、いつも子供たちに教えています。」□



チェコスロバキアへの帰国

ロスティアーア・ゴードンスミス

1990年7月、私は故郷へ帰ってきました。22年前に離れた母国、チェコスロバキアのプラハに戻ってきたのです。祖国を離れたのは、当時の政治情勢に我慢できなかったからでした。ところがこの数カ月で、チェコスロバキアに劇的な政変があり、帰国できるようになったのです。

昔の懐かしい気持ちがよくかえると期待していたのに、実際に味わったのはよそ者のような居心地の悪さでした。目に映るものはどれも、つまらない荒れ果てた印象ばかりが残ります。私は先祖や子供時代の思い出が失われたような思いにとらわれました。

ところが、帰国して数日後、雑踏の中を歩いているときでした。突然、周囲の人々への連帯感が込みあげてきたのです。私はまさしく同じ民族の中にいたのです。大きな愛と同胞意識が私を包みました。そして、45年間もの厳しい抑圧の時代を経て、同じ民が手にした自由の喜びを感じたのです。

私は胸の弾む思いで親族や旧友に会い、故国を離れてからの行動を話したり、福音を紹介したりしました。学校の同窓会では、私が教会員であることを伝え、証を述べました。チェコ語で入手できる教会の何らかの印刷物と一緒に、一人一人にモルモン経を贈り、彼らを宣教師に紹介しました。そしてこう言ったのです。「あなたには、もう選択の自由があります。あなたが自分と家族のためにできる最良の選択は、福音を受け入れることです。もし新しい家を建てつもりなら、安心できるしっかりとした土台を据えてください。」

私はプラハにある教会に熱心に集いました。間借りの集会所でしたが、どこにも気兼ねせずに集会を開き、親族や友人と福音について自由に語り合えることに、会員たちは大きな喜びを感じていました。

長男のデビッドは聖餐を配りました。その後、家庭で開いた証会で、彼は聖餐を配ることによって神権に伴う祝福と責任がわかった、と話してくれました。

私にとって実の妹たちとの再会は、格別な出来事でした。そのひとり、エローナ・ケバートと娘のオルガとは、一緒に教会へ行きました。オルガは専任宣教師の外見や

振る舞いに強い印象を受け、「同年代の男の子たちで、宣教師のような人を見たことがないわ。まるで別の世界から来た人たちみたい」と言いました。

私たちはまた、第二次世界大戦の前後を通じてチェコスロバキアで最初の伝道部長である、リチャード・W・ウインダー長老夫妻にお会いする機会も得ました。エローナは、ウインダー兄弟姉妹ご本人や、おふたりが伝道のために後にしてこられたソルトレークシティーでの生活、チェコスロバキアでの質素な暮らし振り、人々に示される愛に、とても関心を持ちました。そして、伝道部長夫妻の靈性に触れ、涙を流しました。

チェコスロバキアを離れる予定日の5日前のことです。ゴードン・B・ヒンクレー副管長がチェコスロバキアを訪れ、プラハから160キロ離れたブルノで集会が持たれることを、ウインダー伝道部長から知らされました。伝道部長は、私にその集会に参加して、ヒンクレー副管長の通訳をするように依頼されました。私はその責任を引き受け、エローナと一緒に車でブルノまで行きました。

この集会は、今回の帰国の中でも圧巻でした。ヒンクレー副管長夫妻をはじめヨーロッパ地域会長のハンス・B・リンガー長老夫妻、ウインダー伝道部長夫妻、そして福音で結ばれた兄弟姉妹が一堂に会したのです。私は緊張しながら通訳し、教会用語をチェコ語に置き換えていきました。ヒンクレー副管長はそんな私の様子を見て、とても思いやりをもって接してくださいました。だれにとっても靈的な経験でした。エローナは終始ヒンクレー長老から目をそらさず、会衆の中から私の方を見て、笑みを浮かべていました。

あの帰国以来、私がまいた福音の種が実を結び始めたのを知りました。めいのオルガはバプテスマを受け、今はイギリスのロンドンでホームステイをしています。彼女は次のような手紙をくれました。「私はおばさんが訪ねてくれたときに、おばさんの証を聞きました。そのときはおばさんの言っていることが、よくはわかりませんでした。もっと知りたいと思いました。でも、今、教会員になってわかりました。私は自分の年齢で体得する以上の深い知恵を身につけたような気がします。人生に



目覚めました。自分のなすべきことが初めてわかったのです。」

私はチェコスロバキアに帰国し、失ったと思っていた心のきずな、つまり家族や友人たちとの再会を果たすことができました。しかも、真理を求める人間の基本的な欲求は決して絶えることはない、ということも学んだのです。福音はチェコスロバキアで広がり、チェコ人とスロバキア人の聖徒たちは世界に広がる教会の家族の一員として、正当な受け継ぎを得ることでしょう。□



上——1990年にチェコスロバキアに帰国した際、ロスティエーア・ゴードンスミス姉妹はリチャード・W・ウインダー伝道部長夫妻に会った。下——ロスティエーアとエローナ、そしてヒンクレイ長老夫妻。ロスティエーアはブルノの集会でヒンクレイ長老の通訳を務めた。彼女は現在東京イングリッシュ第2ワード部扶助協会の霊的生活教師を務めている。

右の車線へ

ビクター・ミゲル・ボッタリ



雨の降る、1988年3月のある日のことです。車の警告灯と方向指示器がつかなくなったので、修理工場まで乗って行く途中でした。ハイウエーに近づいたとき、私は、遅い車両用の右側車線を走った方がよいという気持ちを強く感じました。ところがハイウエーに入ると、どういうわけか、流れの速い左車線を走行していました。

時速70キロほどで走っていて、カーブを曲がりきったとき、同じ車線の前方に車が止まっているのが目に飛び込んできました。

一瞬のうちに頭の中を様々な考えが駆け巡りました。方向指示器をつけて、後続車に右側への車線変更を伝えようかと思いましたが、故障でつきません。減速しながら右へよけようかとも思いましたが、私の車に平行してトラックが走っています。左側はぬかるんだ路肩が続いていました。

残された方法は、ブレーキを踏むことだけです。路面はぬれて滑りやすくなっています。停止車両が目前に迫った所で車は止まりました。

私は雨の中に飛び出して、カーブを曲がってくる後続車に合図を送りました。心の中では危険から守ってくださった天父に感謝し、警告の声に耳を傾けなかった自分を赦して下さるよう祈り求めています。

この出来事で、聖霊のささやきに聞き従う大切さを学びました。私はこの教訓を決して忘れないでしょう。□



「アルマとアミュレク」 キヤリー・L・カッツ画

不当に投擲されたアルマとアミュレクは、迫害者たちから衣服をはぎ取られ、縄で縛られ、ののしられた。「二人はどのように苦しみながら何日も過した……。」(アルマ14:23) しかし、アルマの救いを求める祈りに主はこたえられた。彼らを縛っていた縄は断ち切れ、「地がはげしく震い、牢屋の壁が裂けて地に倒れて、アルマとアミュレクを打った。[人々は]倒れた壁のために殺されてしまった。ところが、アルマとアミュレクとは……傷も受け[なかつた。]」(アルマ14:14-29)



「**大**管長会の委任の下に、私はブダペストのゲレルトの丘(写真)で、ハンガリーの地を奉献する特権に浴しました。」十二使徒定員会会員のラッセル・M・ネルソン長老はこう語った。今月号の特集の中で、ネルソン長老は中部および東ヨーロッパで起こった最近の歴史的な変動が教会にどのような変化をもたらしたかを紹介している。(本誌「ヨーロッパに展開するドラマ」p. 8 参照)

教会の集会に出席する

アジア北地域会長会長
W・ユージン・ハンセン

現在の教会幹部の責任を受ける以前、私はほぼ9年間にわたってステーク部長を務めていました。その責任をしていてとても楽しかったことのひとつは、これから結婚する会員たちと会うことでした。面接の目的のひとつは、ふたりが新居に引っ越し、共に生活を始める準備を進めていく中で、霊的な健康を保つために役立つと思われる事柄を助言することでした。

「人生」と呼ばれるこのチャレンジに満ちたすばらしい体験を前にして安全な航路を定められるように、私たちに数多くの戒めや誓約、指示が与えられています。しかし中には、それらのことを考えてかえって押しつぶされそうな気持ちになる人々もいます。しばらく前に、たまたま、リチャード・L・エバンズ長老のテープを聴いていたとき、人生についてのある人の定義を知り、感銘を受けました。「人生とは、あなたが計画を立てている間に過ぎ去っていくもの」とこの引用者は述べています。なんと真実をついた言葉でしょう。

大半は若いカップルでしたが、こうしたすばらしい人々に、私はどのように助言したのでしょうか。彼らはこの地上で永遠の家族を築き始めようとしている人々です。

大抵は、ヨシュア記第24章15節にある、だれもがよく知っている聖句を要約することから話を始めました。「あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」若人がこのような決意、すなわちどのような事柄に取り組むときも、主に仕えるという純粋な望みを抱いて結婚生活を始めれば、真の喜びと幸福を見いだせることを、私は知っていたからです。

また、主に仕える決意があれば、必要な導きと指示が受けられることも知



っていました。こうして彼らの生活に目的と意義が生じ、社会の中であって基本的に「受ける側」ではなく、「与える側」にいるすばらしい、そして力強い人々の一員になることができるのです。

では、個人や家族はどのようにして主に仕えるのでしょうか。それには明らかに様々な方法があり、求められている事柄もまちまちです。しかし、やがて花嫁、花婿になろうとする人々と共に過ごすこの貴重なひとときに、私は霊的に豊かで幸せな生活の土台になると思われる基本的な事柄について助言を与えました。同時に私は、彼らには自分で自分の生き方を選ぶ自由意志のあることを常に心に留めました。確かに人には、何らかの活動や才能を大切にするために、ほかの人であれば選択しないような生き方を選ぶ自由があります。しかしながら、霊的な健康を保とうとするなら、だれであっても同様に守らなければならない一定の基本があります。

それらの原則をすべて論じるには時間もスペースも十分ではありませんので、すべての教会員に当てはまる原則をひとつだけ取り上げたいと思います。

それは「教会の集会に出席する」と

いうことです。

善良な人々の中には、自分で問題をむずかしくしている人もいます。彼らは日曜日の朝ごとに、その日1日何をしようか迷います。教会に行って集会に出席しようか、それとももう少し寝ている理由でもないものだろうかと心の中で考えます。何と言っても、先週は仕事(あるいは学校)やいろいろな事柄で忙しくて、家族で集まって話をしたり、一緒に何かをしたりする時間さえ取れなかったのだから、と考えるのです。そして、それができるのは日曜日だけだと自分に言い聞かせます。日曜日は安息を取る日なのに、寒い曇った日にわざわざ起きて、とぼとぼと教会まで行って集会に出席したところで体は休まらないだろうと、合理化するのです。しかも、聖餐会の話者は特に自分が好きでもない人かもしれないのです。

どれも間違った理由であることは言うまでもありません。日曜日に私たちがどこにいないければならないと主はおっしゃっているのでしょうか。教義と聖約第59章9節を見てみましょう。「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様、祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」

主が私たちに安息日を与えてくださり、日曜日ごとに集会に集うように命じられたことには理由があります。主は私たちをご存じであり、私たちの霊の御父です。人間にはどちらかというすぐに忘れる性癖があることを、知っておられるのです。定期的に集会に出席するなら、霊の栄養を取ることができます。すなわち、私たちが誓約の民であり、主の教会の会員として義務を持ち、厳粛な約束を交わしていることが思い起こせるのです。聖餐を取るときには、主を覚え、その戒めを守ると誓約します。

自分が所属するワード部や支部に集えないときや、旅行に出ているときでも、やはり主は教会の集会に出席するよう私たちに望んでおられます。滞在先のワード部や支部で聞く説教壇の話者の言語は、自分には理解できないかもしれませんが。それでも私たちは聖餐

を取り、みたまを感じることはできます。またそれは、旅行に出、休暇を取るための手段や機会が与えられた祝福に感謝していることを主に示すうえで、またとないひとときでもあります。世界中どこへ行っても、支部やワード部の所在を熱心に調べるのが肝要です。

ほかのすべての祝福と同じように、従順により「良心の平安」と私たちが予想もできないような祝福がもたらされず。すべての人々が賢明で勤勉であって、日曜日ごとに教会の集会に出席し、そこからもたらされる祝福を享受できるように願っています。□

チャーチニュース

ローカル

ジョセフ・アンダーソン長老逝去

名 誉教会幹部であったジョセフ・アンダーソン長老が、1992年3月13日ソルトレークシティの療養先で亡くなった。

享年102歳であった。これは、教会幹部として働いてきた長老たちの中で最高齢である。

アンダーソン長老は大管長会の私設秘書を長い間務めた後、1970年に十二使徒評議員会補助に召された。1976年には七十人第一定員会会員に召され、1978年に名誉教会幹部となった。

長老は、ソルトレークシティで1889年11月20日に生まれた。1911年か

ら14年にかけてスイスとドイツで専任宣教師として奉仕した。ユタ州に帰還してから企業に勤めていたが、1922年にヒーバー・J・グラント大管長の秘書に召された。同様にその後続く4人、すなわちジョージ・アルバート・スミス、デビッド・O・マッケイ(アンダーソン長老は、マッケイ大管長が教師をしていた当時の教え子でもあった)、ジョセフ・フィールディング・スミス、ハロルド・B・リーの各大管長のもとでも秘書を務めた。

生前アンダーソン長老は、長生きの秘訣は知恵の言葉を守ることにある、と



述べていた。そして90歳を超えてからも定期的に水泳をして健康を保っていた。

1915年にソルトレーク神殿で結婚したノーマ・ビーターソン姉妹とは、1985年に死別している。□

英雄を生んだ医療援助

先 ごろ教会はベトナムの医療事情向上に貢献するため、医療機器を寄贈した。寄贈された機器は、皮膚移植の際に神経の吻合みあはせなどを行なう顕微手術に役立てられる。

さらに、合衆国から何人かの末日聖徒を含む医師団が、アジア地域会長会のマーリン・R・リバート会長と共にベトナム入りした。教会幹部がベトナムを訪れたのは、1975年のベトナム戦争終結後、初めてである。

同医師団は、「スマイル作戦の会」の活動の一環として7件の外科手術に加え、医療講習会も実施。「スマイル作戦の会」とは、青少年や子供たちに無償で形成外科手術を施すために、発展途上国に医師団を派遣している非営

利団体である。

「スマイル作戦の会」を率いているのは、バージニア州チェサピークステーク部長でもある医師クレグ・メレル兄弟である。彼らは付与された医療機器の使用法を、ベトナムの外科医を対象に教授した。

メレル兄弟は次のように述べている。「今回の医療機器の寄贈と医師の訓練により、有能なベトナム人外科医の手で、多数の患者に複雑な外科手術を施せるようになりました。

患者たちの喜びにあふれた表情や、歩いたり握手したりする姿を一目見れば、すばらしい温かい気持ちを感じることが出来ます。それこそ私たちが人生で探し求めるものではないでしょう

か。このような気持ちは、人に仕え、助けの手を差し伸べるときに得られるものです。」

リバート長老も次のように述べている。「医師団から訓練を受けた外科医はまるで英雄扱いです。なぜなら、彼らのおかげでこれまでとは比べものにならないほど効果的な治療を受けられるようになったからです。」

今回の訪問でベトナムの政府高官とも会したりリバート長老は、次のように語っている。

「私たちが会った政府の人々は、とても積極的で友好的でもありました。……おそらくこのたびの活動をきっかけにして、今後も何らかの形で援助する機会があるでしょう。……この国の人々の心には希望があります。皆とても親しみやすく、楽観的な人々で、私たちにとても親切にしてくれました。」(「チャーチニュース」1992年1月11日付)

南アフリカ・ソウェトに初の教会堂

南アフリカの黒人居住区として名高いソウェトに、教会初の集会所が建設されることになった。1991年12月1日、小雨の降る中で行なわれた**（おこし）** 献入式には、アフリカ地域会長会会

長であり、七十人のリチャード・P・リンゼー長老をはじめ、南アフリカ・ヨハネスバーグステーク部の指導者、ソウェト支部の支部長会と会員たちが集った。

ソウェト地区は長年、暴力や対立のはびこる危険な場所であっただけに、教会堂の建築は周囲の住民に希望の象徴として迎えられている。このソウェト地区には将来ワード部がふたつ設けられるであろう、というキンボール大管長の約束がある。（「チャーチニューズ」1992年1月18日付）

天父とイエス・キリストに対する敬虔さを 子供に教えるには

我が家では、子供たちに天父とイエス・キリストに対する敬虔さを、次のようにして教えています。

●天父は声に出さない心の中の祈りも聞いておられ、だれがどこで何をしているかもご存じであることを、子供に教えます。娘のジェニーはわずか4歳ですが、この真理を理解しています。

●イエスが人のために創造してくださったものについて話し、天父とイエス・キリストが**（けいけん）** 全知全能であられることに対して、畏敬と尊敬の念を抱くように教えてください。私たちが所有し、使用するものの中で、最初から人間が作り出したものは何ひとつないことも教えます。12歳になる娘のリネッテはきょう初等協会で、何を見ても、最初にイエスが造られたものにまでさかのぼってみるよう教わったことを、話してくれました。

●自然界の被造物に感謝して、親としての模範を示してください。花や果実の入り組んだ仕組みを子供たちに調べさせるのは、それらを造られた天父と御子に敬意を抱かせる良い方法です。子供たちは周囲の世界に対する知識も身につけられます。さらに教師や親が天父と御子に対して敬虔であれば、子供たちは心を開いてそれを感じ取るでしょう。

●天父がすべての人に示された愛について教えてください。天父は地上に御子を遣わされ、御子はそこで人々に教え、苦しみ、死なれました。イエスは進んでそうされたのです。子供がこの

点を理解すると、天父と御子に愛と敬虔な気持ちを感じるようになります。

●家族の祈りを行なってください。そうすることによって、親である私たち自身が天父とイエス・キリストに対して抱いている尊敬の気持ちや、おふた方の助けを必要としている気持ちが子供たちに伝わります。おふた方なくしては、私たちの生活は不完全だからです。イリノイ州イヤービル

ビッキー・カトラー

■幼いときから教える

アリゾナ神殿で結婚したとき、私たち夫婦は、子供に幼いときから福音を教えるよう助言を受けました。神を敬う心は、私たちが早い時期から子供たちに身につけさせようと努めてきた原則のひとつです。祈りの中では敬虔な言葉を用いて天父に話しかけるようにも教えています。

また、集会の中でも**（せいさん）** 聖餐を取るひとときを特に強調し、その聖なる儀式と、救い主の贖いに敬虔な思いを抱くことの大切さを、折にふれて話してきました。子供たちは、聖餐式が単なる「静かにする時間」ではないことを知っています。礼拝に対する子供たちの熱意は、親にとっても**（いんげん）** 灵感の源です。

カリフォルニア州キャメロンパーク
ケリー・バルデス

■子供の理解力に合わせて

私は最近、ワード部初等協会の副会長に召され、ずっとこの問題について

考えてきました。

子供には天父とイエス・キリストについて教え、おふた方に対して親しみや愛を感じさせなければなりません。おふた方を尊び、おふた方に愛を感じない限り、敬虔な思いを抱くこともないでしょう。子供には、小さいうちから聖書物語や「モルモンけいものがたり」を用いてイエスについて教えてください。子供の理解に合わせて教える必要があります。

私自身子供のとき、一番思い出に残っているのは、イエスと子供たちの話を聞くことでした。イエス様のひざに抱かれたらどんなにすばらしいだろうと、子供心に思ったものです。子供のころよく自分は特別であると感じました。それは、自分を愛して、温かく包んでくださる方がいることを知る助けになりました。これを初等協会で教えるなければなりません。どんなときにも天父とイエスは私たちが愛してくださっています。この点を理解すれば、子供たちも容易に天父と御子に敬虔な態度が示せるようになるでしょう。

ユタ州ソルトレークシティ
トルーディー・ワーズワース

■キリストを思い起こす

我が家には2歳から15歳まで、6人の子供がいます。家庭の夕べを開いている限り、子供たちは教会でも良い子になろうと努めているようです。家庭の夕べでは敬虔さについて教え、聖餐式の間は腕を組むように教えています。

これが子供たちに聖餐を取る理由を教えさせるきっかけになっています。子供も腕を組むと祈りを思い出すようです。祈りについて考えると、キリストを思い起こし、なぜ聖餐を受けるのか考えるようです。

ニューヨーク州リバプール
ポーラ・J・エバンズ

■ 親の模範

我が家には4人の子供がいて、家族全員で聖典を学び、祈る時間を設けています。モルモン経を読むときには、年上の子供たちに質問をして、ちゃんと聞いていることを確かめます。すると子供たちの答えから、天父と御子イエス・キリストに対する尊敬の気持ちがうかがえるときがよくあります。一緒に聖典を読み、祈りをする部屋には、キリストの絵を壁に掛けています。

家族の祈りをするときはひざまずきます。賛美歌を歌って祈るときもあります。一番下の娘には、祈りは天父に話をする時間であって、遊んだりふざけたりする時間ではないことを言い聞かせ、敬虔さを強調しています。末娘も時がたつにつれ、理解してきているようです。家族の祈りが終わると、親しみを込めて抱き合います。こうして子供たちも、聖典や祈りを愛と結びつけて考えています。

神聖な事柄に対する親の態度が、子

供たちの模範になっていることは、言うまでもありません。神殿に参入し教会の集会に出席することによって、主を愛し、敬わなければならないことを、子供たちは知るので。

カリフォルニア州レイクエリザベス
ホリー・ホルムクイスト

■ 自らの敬虔さを示す

まず親が天父とイエスに対して敬虔であること。それが、親が子供に敬虔さを教えるようにするときにはできる、唯一の、一番大切な事柄です。つまり、親自身が家族の祈りの中で敬虔さを示し、主がそのみ手をもって、花、樹木、灌木、鳥、りす、うさぎ、そのほかの動物など、自然界に美しいものを創造してくださったことを感謝する必要があります。

子供に敬虔さを教えるうえで2番目に大切なのは、家族が互いに尊敬し合うことです。我が家では服やおもちゃなど、人の持ち物は大切に扱います。

3番目は、教会幹部や地元の指導者に対し、家庭の中で親が愛と支持とを表わすことです。

メリーランド州アリコットシティ
トム・ワイニングス、
ヘレン・ワイニングス

■ 人を高める言葉遣い

敬虔さを教えるために一番効果のあ

る方法は、家庭で人を高める言葉遣いをする事だと思います。前向きな話し方には、適切な声の調子と、親切言葉遣いが含まれます。我が家では、否定的な言葉は使わないというまきを設けています。この方法は、子供に天父とイエス・キリストに対する敬虔さを教えるうえで、大きな効果を上げています。家族同士が敬虔な態度で接しているからです。これが第一歩です。こうすれば子供は、心の中で天父やイエスを敬うことにも、異和感を感じません。家庭内でそれぞれが尊敬の気持ちを込めて接しているので、子供たちは天父やイエスに対しても自然と敬虔な思いを持っています。子供たちはこうして敬虔さを理解しています。
ケンタッキー州ボーリンググリーン
ビッキー・ジェイコブセン

まとめ

1. 天父とイエスが子供たちを愛しておられることを教える。
2. 家族で祈り、聖典を学んで、子供たちに祈ることを教える。
3. 聖餐と主の被造物に対する敬虔さを身につけさせる。
4. 模範を示す。敬虔な態度を示し、教会の指導者を敬う。

(「チャーチニュース」1992年1月25日付)

ローカルニュース

ローカル

再組織された 福岡ステークス部長会

去る1月12日、アジア北地域会長会会長W・ユージン・ハンセン長老管理の下に開催された福岡ステークス大会において、ステークス部長の責任を果たしてこられた野間龍一兄弟が解任され、新たに山下和彦兄弟が召されました。第一副ステークス部長には新原一男兄弟(写真左)が、第二副ステークス部長には赤坂清兄弟(写真右)が召され、その任に当たります。



主と多くの人々の 導きを経て

福岡ステークス部長
山下和彦

高校2年の夏、1970年の大阪万国博覧会がきっかけで私は教会を知りました。モルモンパビリオンに入り、映画「幸福の探求」を見て信じ難い印象を持ったことをよく覚えています。しかしその後、宣教師の訪問を受

け、彼らの愛と模範に触れ、彼らの言葉信じるようになっていきました。そして翌年の7月、私は希望を持ってバプテスマを受けました。それ以来今日まで、恵まれて順風の中を歩んできたように思いますが、今回ステーク部長の責任を受けて過去を振り返ってみると、主の導きだと思わざるを得ない思い出があります。

改宗したばかりの高校3年の冬、ほかの3年生同様私も受験生としての毎日を送っていました。入試日が近づき、緊張感とプレッシャーが増してきた年末のある日、私はひとつの決断をしました。受験が終わるまで教会には行かない、と。年が替わって1月から私は教会に行きませんでした。しかし受験の結果は期待していたほど良いものではありませんでした。ようやく希望校のひとつに合格しましたが、教会に行こうという気持ちは薄らいでいました。

そのころ私に毎週のように電話をかけてくれたひとりの兄弟がいました。温かい電話を受けるうちに、私の心は次第に変化していきました。そして4月のある日曜日、私は思い切って教会に行くことにしたのです。教会では兄弟姉妹たちが握手をし、温かく私を迎えてくれました。あのときのフェロシップがなければ、私はもっと長い間教会から離れていたかもしれません。主の導きと兄弟姉妹の愛に感謝せざるを得ません。私はこの貴重な経験から得た教訓を肝に銘じて、それ以後二度と自分の思いで安息日に教会を休まないことにしました。大学入学後も仕事に就いても、やむを得ない場合を除き、戒めを守ろうと努力しました。

12年前、茨城県つくば市で大学院を経て大学の研究助手として働いていた私は、大学で教鞭を執りたいと望んでいました。それは決して容易なことではなく、関東周辺の大学に就職の口はなかなかありませんでした。ようやく恩師からよい勤め先があると連絡があったのが、現在務めている福岡の大学でした。福岡は私にとっても家族にとってもあまりにも遠い所に思えました。母も兄も福岡行きには難色を示しました。理由はふたつありました。ひとつは実家のある埼玉県から距離的に

遠すぎること、もうひとつは父が脳軟化症のため寝たきりの状態だったことです。私自身も父の状態や友との別れ、教会や自分の研究環境などを考えるととても福岡へ行く気にはなれず、恩師には丁重にお断わりしました。しかしその後も恩師の強い勧めを繰り返し受けたため、時間をかけ家族や教会の指導者など様々な方と相談し、祈りました。不思議なことに周囲の意見は徐々に福岡行きを勧めるようになり、私自身も福岡行きに傾いていきました。平行して真剣に考えていた結婚についても、愛する田鶴子姉妹と結婚し、新しい福岡の地で生活することにチャレンジしようと思つたに至りました。私にとって本当に重大な決断の時でした。

福岡に来てからはあらゆることが新鮮で、知人、友人、親戚だれもいないところからの生活が始まりました。それゆえ得たものも多かったように思います。新しい職場、新しいワード部、初めての方々との出会いでたくさんの愛を受けました。所属する藤崎ワード部では歴代の監督をはじめとする兄弟姉妹たち、伝道主任や監督やステーク部伝道部長の責任を通して接した多くの宣教師や伝道部長、伝道主任やステーク部宣教師から愛と助けを受け、多くのことを学びました。さらには自分

の職業を通して多くのことを考え、学びました。若い学生たちと共に学び、考える機会とはとても大きな喜びです。

私はこのたびの召しを受け、これまで私を導き、教え、訓練をし、見守り、愛してくださった主と、私と妻の両親、改宗した大宮伝道所、その後集った浦和ワード部、また東京北ステーク部で出会った指導者や兄弟姉妹、宣教師にただただ感謝の気持ちでいっぱいです。そして今もすばらしい副ステーク部長や高等評議員、監督、支部長の方々と共に働く機会に感謝しています。最後に、私の長所も短所もすべてを知り、いつも支持し助けてくれる愛する妻と5人の子供たちに感謝します。

私は神様が生きていらっしゃる、私たち一人一人を愛してくださっていることを知っています。またイエス様が私たちの救い主であり、贖い主であることを証します。そして私たちが主に頼り、主のみこころを考え、主の導きを受けることがどんなに大切かを知っています。私自身これを実践し、主の教会の指導者として、主の模範に従っていきたいと思います。また、不変の神様の言葉すなわち聖典を学ぶことを大切にしていこうと考えています。□



山下和彦ステーク部長ご家族

再組織された 長野地方部長会



去る1月19日、東京北伝道部の菊地敏伝道部長管理の下に開催された長野地方部大会において、地方部長の責任を果たしてこられた関敏朗兄弟が解任され、新たに松橋春海兄弟が召されました。第一副地方部長には改崎哲郎兄弟(写真左)が、第二副地方部長には佐藤郁兄弟(写真右)が召され、その任に当たります。

全力を尽くして

東京北伝道部長長野地方部長
松橋春海

1976年3月、私は高校2年の春休みを迎えていました。1年のときにはクラス委員長を務めた私でしたが、2年になってからは、クラス替えで知り合った友達とたばこや酒をのみ、授業を抜け出して中庭の芝生で授業中に昼寝をするなど、教師を困らせていました。しかし何をしても満足感が得られず、いつも気がつく人と人にへつらっている自分がいました。「むなし。」「そんな言葉がびつりの少年でした。

そんなある日、私は何の当てもなく町へ出かけ、宣教師に出会いました。福音を話す宣教師のお兄さんのような温かさ、神様と直接会ったジョセフ・スミスという人、初めて聞く安息日やそのほかの戒めなど、すべてが新鮮でした。そんな小さな信仰だけでバプテスマを受けました。けれども教会員の模範と活動の楽しさのおかげで、私の生活態度は次第に明るく前向きなものになっていき、知らず知らずのうちに主の愛を受けていました。「汝ら、人の値は神の前に大いなることを憶えよ。」(教義と聖約18:10)主はこう言

われているばかりでなく、兄弟姉妹を通して私に愛と関心を示してくださいました。しかし私はやがて、主の愛がさらに深く大きいことを、ひとつの経験によって教えられたのです。

教会員生活5年目のころ大学を卒業して就職しましたが、伝道に出たいという思いがどうしても消えませんでした。年齢、結婚、両親、仕事と問題は多くありましたが、そのころ知り合った妻にとって最もふさわしい伴侶になりたいと思い、伝道を選びました。しかし、私にとって伝道は試練そのものでした。覚えられないレスンプラン、訓練センターでの劣等感。気持ちを整理できないまま任地、札幌伝道部へ赴任。予想外の北海道の夏の暑さ、同僚関係。最初の7カ月はバプテスマを施すこともなく、家庭集會もわずかで、希望は失望へと代わっていきました。長老の任期も18カ月の時代に召されながら、11カ月が過ぎても後輩のままでした。同期の仲間から、先輩や監督長

老になった知らせが来るたびに苦しい思いをしました。今思えば、それらの苦しみは人と自分を比べる名誉心や利己心から来たものだったのです。私はたびたび、それまでになく熱心に祈るようになりました。主に、私を思い出して、奇跡によって暗やみから助け出してくださいるように祈ったのです。しかし助けはありませんでした。「主は私を忘れてしまった」と思いました。

そんなある日、私はある指導者の言葉を思い出しました。それは「あなたが今どんな状態であれ、全力を尽くしなさい」というものです。宣教師として、教会員として、自信を失っていた私の心に、この言葉は非常に強く響きました。私は主に祈りました。「父なる神様、私はもう何も望みません。ただ残る時間をすべて使って一生懸命働きます」と。たとえこのまま家庭集會がなくても、後輩のままで終わっても、改宗者を見ることなく、全力で働く決心をしました。町の地図を買い、



松橋春海地方部長ご家族

訪問した家をチェックし、まだ訪れていない家を調べて、その家の扉をたたき続けました。もう足を止めませんでした。日増しに喜びが増していきました。

それから1カ月後、私たちは支部のバーベキュー大会の用意をしていました。前日は転任発表の日でしたが、異動はありませんでした。ところが突然札幌市内にある厚別ワード部で働く宣教師から電話があり、松橋長老がまだ来ていないが、どうしたのかということです。巡回宣教師が転任の連絡を忘れていたのです。バーベキューのために教会に集まった兄弟姉妹に別れを告

げて、急きょ厚別に向かいました。

バスの中の6時間、不安と期待が入り乱れていました。厚別は伝道部内でも改宗者の数が一番多かった所で、前の宣教師も非常に優秀で、たくさんの人を改宗に導いていたからです。そのとき私の心の中には、あの言葉が響いていました。「あなたが今どんな状態であれ、全力を尽くしなさい。」新しい任地でも、私は以前と変わらず働き続けました。同僚はとても良く助けてくれました。そこではひとりの女性がバプテスマを受け、責任も受けて子供たちと一緒に元気に集っています。また、前の宣教師から引き継いで福音を

お伝えしたあるご主人も、今では立派な神権者です。

伝道を通して主は私に愛を示してくださいました。また、無私の奉仕を通して問題は克服できると教えてくださいました。「この故に、汝ら神の役務に出で立たんとする者は、終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たんため、すべからく心をつくし、勢力をつくし、思をつくし、体力をつくして神の役務をなせ。」(教義と聖約4:2)

地方部長の責任をいただいて、私はまたあの言葉を心に思い浮かべています。「あなたが今どんな状態であれ、全力を尽くしなさい。」□

霊は肉体よりも強し

町田ステーキ部湘南ワード部
永井常雄

親が我が子から教えられることは数多くあると思います。人は決して孤独では生きられず、心の支えに、自分を気遣ってくれる人、意見を受け止めてくれる場、共に汗して肩たたき合える仲間など、出会う様々な人から多大な影響を受けていることを、長男祐一郎の6年間の闘病生活を通して改めて学びました。

祐一郎は本当に元気な子で、夕方まで外で遊んで泥んこになって帰宅するのが日課でした。けれども病は突然やって来ました。小学校5年生の3月、頭痛を訴え、吐き、苦しみました。頭の中心部に腫瘍があることが判明し、11時間にも及ぶ手術が施され、人工のパイプを頭から体の内側に埋め込むことによって一命を取り留めました。腫瘍は一部残りました。脳の中核部にメスを入れるには限界があったからです。それは腫瘍をすべて取り去ってしまうか、人間として考え、行動する能力を残しておくかの選択だったのです。

それからの3年間に4回の入退院を繰り返して、親としてははらはらする思いもりましたが、その後は順調に快復し、体をいたわりながらではあっても比較的元気に過ごせる時期が過ぎました。しかし体力の回復のためには、1

日に12時間の睡眠が必要でした。体を動かすことよりも、頭を使って考えること、特に記憶することにはかなりの疲労を覚えるようでした。あるとき、医師に言われました。「このまま腫瘍が動かず、拡大してこなければいいのですが……。好きなことをさせてあげてください。」

やがて初等協会から青少年(ユース)に移り、アロン神権を受け、セミナーの開始と、生活環境が変わっていく中で、息子の喜びも悩みも共に膨らんでいきました。学校で話し相手になってくれる友達がひとりもいなくなった。約束すら覚えられず落胆したりした時期、自分の身も心もなくなってしまった方がよいとすべてのことから逃げ出してしまっていた時期。そんな中であってセミナーで福音を学ぶことは、息子にとって生きがいになりました。真理が人を変える日が訪れたのです。

学校の勉強には追いつけなくても、セミナーだけは楽しんでいました。体力的に登校できない日があっても、セミナーには行きました。1年間留年することになって、セミナーの方を取りました。身も心も揺れ動き、模索する中で、何よりも清さを求め、

心から主を賛美し、主に頼ろうと自分自身にチャレンジを課したのでしょう。セミナーの前半では正義感ばかりが先行していた息子も、主の教えを学ぶにつれて、自分を取り巻く人々のことや、自分の弱さを知り、人を救って無条件で受け止め、愛を実践するようになっていきました。

時を同じくして、体の右半分にしびれが出るようになりました。やがて右手で文字を書くのが困難になり、次に右足も不自由になってきました。子供のいすを改造して自転車の後ろに取り付け、セミナーのために教会への送り迎えがしばらく続きました。冬の夜明けは遅く、まだ暗い中を大声で賛美歌を歌いながら通ったものです。あの子の息子の血行の悪くなって冷えきった手が今でも思い出されます。

青少年の仲間も祐一郎にとって大きな支えとなっていました。夏にはキャンプ、冬には演劇と、回を重ねるごとにそのきずなは強くなっていったようです。ある日、息子は目を輝かせて言いました。「お父さん、ぼくね、きょう本当の友達見つけたんだよ。」後に目にした日記には、手作りの人形劇に取り組んでいたころのことが、次のように記してあります。「……ぼくはこのとき初めてすばらしい友人、心から話し合える友を見つけた。この友達と永遠にわたって共に歩みたい、すばらしい友人に囲まれているぼくはなんて幸せなんだろう。」

高校入試も何とか乗り切り、中学の



1988年夏、富士山5合目に立つ永井常雄兄弟(右)と祐一郎兄弟(左)。祐一郎兄弟はこの約1年後に亡くなった。

卒業式にはお世話になった先生やクラスメート全員に、足を引きずりながら、自分の力で『聖徒の道』を配っていました。その春休みには2泊3日のユースカンファレンスが企画されていました。息子は大変乗り気でしたが、私はためらいました。病院も会場の近くにはなく、右手足の麻痺や睡眠時間などのことから、皆に迷惑をかけることばかりが気になっていたからです。それでも参加したいという息子のために、初日のウォークラリーの活動を見送って、2日目に車で送ってあげようという監督の厚意に甘えるのが一番良いのではないかと思われました。しかし息子はこの計画には不満でした。初日から皆と一緒に活動し、溶け込みたかったからです。そのうえ青少年の仲間や指導者も応援を買って出てくれました。一緒に行かせてほしい、ぼくたちが見守るから、と。その夜は久しぶりに夜遅くまで親子で話し合いました。私は意気込みだけでは乗り切れないこともあるんだと説得するつもりでいましたが、結局は息子の熱意に負けてしまいました。

日記にはこのようにつづってあります。「3月24日。ぼくはこの話し合いで、『聖徒の道』1989年2月号のマービン・J・アシュトン長老のお話をした。ぼくはこの中に出てくる、ぼくと同じような体をもったマイク以上に頑張りたいと思っている。」「3月27日。ぼくの心は今、喜びでいっぱいだ。さっきまで騒いでいた弟たちも、もうふとんの中で目を閉じて、さわやかな夢を見ているのだろう。ああ、ぼくはなんていい家族のもとに生まれ育ったのだろう。ぼくはこの家族を永遠のものにしたい。それはぼくの宝だから。」慣れない左手で書いたたどたどしい文

字からは、ひたむきで純粋な思いと、3日後に始まるカンファレンスに初日から参加できることへの喜びが伝わってきて、私は胸を打たれました。実際多くの人々のおかげで無事参加できたカンファレンスは、息子にとって計り知れないほどの価値あるものとなりました。

それまで入院するたびに何度もつらく、痛い思いを繰り返してきた息子ですが、病に対する恨み事を口にしたことはありませんでした。その年、息子にとっては最後の入院をすることになりました。「きょう、ぼくはまた入院した。点滴で治療するために。でも病院の人たちに明るい笑顔で接していれば、神様も喜んでくれると思っている……。」「お母さんに頼んだ。ユースの人たちにぼくの見舞いに来ないでほしい、代わりにほかの人たちのことを心配してあげてほしいと。ちょっと気取っていることかもしれないけれど、それが神様に尽くすことになると思うからだ。」「お母さんに伝えてもらったけど、本当の気持ちはそれとまったく逆で、愛するユースに会って、いろいろ話がしたかった……。」「日曜日。午後になってぼくの目の前にユースが現われた。彼らの目は輝いていた。」このころには幸い左手と左足はまだ自由が利き、見ることも可能でしたが、やがて耳はもう両方とも周りの音を聞き取れないほどになっていきました。こうなると、努めて明るく振る舞っていた表情や感情も表わせなくなって、筆談で交わす言葉にうなずくしかありませんでした。

8月に入って医師に直々に呼ばれました。「できることはすべてやってきました。祐一郎君、今までよく頑張ってきたけれど、これからはもうあまり

頑張れないでしょう。今のうちに親類の方とお会いしておいた方が……。」3日間の外泊許可が出ましたが、お願いして退院の手続きをしました。苦痛だった点滴から解放してやりたかったのです。

1カ月後の1989年9月24日、祐一郎はこの世を去りました。わずかな期間ではありましたが、何よりも自分の家で、家族のもとで過ごせる喜びと平安を味わったことでしょう。

16歳6カ月という期間、霊よりも弱い肉体をまもってはいても、息子が気持ちを高揚させ、希望を抱き、みたまを求めて真剣に祈ることを覚え、有意義な信仰生活を送れたのは、ひとつには青少年の仲間との心のつながりがあったからでした。そしてセミナーで学び、また、人を愛することのすばらしさに気づいたからでした。息子にとって日々、真理を学ぶことは喜びとなり、生きる力となり、肉体の持つ弱さを克服する力となりました。

「君と共に

1. 君とはじめて出会ったのはいつ
楽しい語らい 主の教え
君と見た冬の
すばらしいあの夜明け
病める身体はなれ 旅立った君よ
いつまでも いつまでも思い出す
あのころを
2. ぼくたちはみんなで福音伝えよう
君の意志ついで 信仰もって
ぼくたちは会える 君とまた再び
その日のよるこびを
胸に秘め 進もう
どこまでも どこまでも
主のもとへ 君と共に」

(作詞：謝花恵美子、作曲：大西誠)

同じワード部のセミナー教師の姉妹と若い男性会長の兄弟が息子のために作ってくださった曲です。

ひとつの思いが妻と私の心に大きな安らぎを与えてくれています。「祐一郎はきっと伝道している、今霊界で。もうすっかり元気になって。」クモラの丘霊園の墓碑にはその気持ちを込めてこのように彫りました。「かの地に於て、若き友らに伝えんと、みこころに沿い備えたる君」(ながい・つねお初等協会教師)

宣教師に感謝します

1992年2月末現在、日本で伝道している宣教師は1,504人(うち日本人長老は164人、日本人姉妹は138人)いる。長老は2年、姉妹は1年半の間、家族を離れ、学業を中断し、仕事を辞めて、任地で伝道活動に専念する。

宣教師は人々に多大な影響を及ぼす。直接福音を宣べ伝え、人々をキリストのみもとに導くこともあれば、間接的に人々に福音を聞きかけを作ることもある。宣教師がある人に渡したモルモン経やパンフレットを人づてに受け取って改宗する人や、主の使いとして雄々しく伝道する姿に励まされて福音を分かち合う勇気を得る会員がいる。また、その模範を通して伝道に出る決意を固める会員もいる。すべてを犠牲にして、自分の望みよりもまず主のみこころを行なうために働く宣教師。私たちはそんな宣教師の一人一人に心から感謝を捧げるものである。



街頭伝道する東南伝道部の宣教師

ある姉妹宣教師へ

東京東
ステーキ部
北千住支部
小林美智子



「あ なたの名前を私は知りません。あなたがどこの出身なのかも知りません。でも多分アメリカだと思います。

今から10年前、あなたは札幌伝道部の旭川で伝道していました。北海道は、厳しく長い冬に終わりを告げたとっても、すぐに美しい春がやって来るわけではありません。雪溶け水ならまだしも、雪と粉じんをミキサーでかき混ぜたような泥が道路にあふれ、車が通るたびにその泥水が跳ねます。そんな中であなたは自転車に乗り、また歩きながら人々に福音を伝えていました。あなたの自転車、コート、靴はきっと泥まみれになったことでしょう。

ある日、あなたは同僚の姉妹とバスに乗っていました。遠くまで伝道に出かけるためだったのでしょ

かにも伝道の精神を携えていたあなたは、そのバスの中でひとりの婦人に声をかけ、教会の英会話について紹介しました。その女性には高校生の娘があり、彼女を通してクラスメートの私も英会話を知りました。それは決して偶然ではなかったと思います。でも私が英会話を習いに初めて教会に行ったときには、あなたはすでにどこかへ転任していたのでした。その後、私はバプテスマを受けました。世は変わらずとも、私の心はなんと大きく変わったことでしょう。福音が私の過去から暗い陰鬱な心の重荷を消し去り、力強い希望を与えてくれたのです。

それから6年後、私もあなたと同じように専任宣教師として伝道に出ました。あなたがきつと多くのものを犠牲にして伝道に出たように、私にも幾分か犠牲が伴いました。しかし、それができたのは、かつての私のような境遇の人をひとりでも救えたらと考えたからです。

伝道中、ちょうどあのときと同じ春の季節、私と同僚は道端でひとりの少女に会いました。彼女がモルモン経を受け取ってくれると言ったとき、私は思わず喜んで彼女の手を握ってしまいました。そして、はっとしたのです。彼女の片手は義手でした。彼女は無口

で、笑うことをしませんでした。しかし福音を学ぶにつれて段々と祈り、自分の気持ちを述べ、笑うようになっていったのです。私が近隣の地域に転任した後に彼女はバプテスマを受けました。数カ月後、ステーキ部大会で私は彼女が聖歌隊の一員として歌っている姿を目にしました。彼女は見違えるほど生き生きと輝いていました。私は胸に熱いものが込み上げ、涙があふれ出てきました。そのときはっきりと思ったのです。多くを捨てても伝道に出た価値はあったと。

彼女にも、いつか私たちと同じように伝道に出る機会が訪れるかもしれません。そのときには、きっと彼女を通して多くの人が真理を見だし、彼女自身も喜びに満たされることでしょう。こうして奇跡が奇跡を生み、その奇跡がまた奇跡を生み、私たちは日の光栄の王国で共に喜ぶのです。

あなたがバスの中でかけてくださった、そのひと声に心から感謝しています。『小さくてやさしい事から大きな事がでてくる。』(アルマ37：6)これは真実です。いつかあなたにお会いしてここに書き尽くせない喜びを分かち合えることを楽しみにしています。』(こばやし・みちこ ステーキ部宣教師)

矢嶋由佳姉妹(左から2番目)



愛をありがとう

町田ステーク部町田第1ワード部
矢嶋由佳

私が初めて教会に来たのは去年の8月、英会話がきっかけでした。すぐに宣教師から福音を学び始めましたが、そのころ人間不信と自己嫌悪でかなり荒れていた私には、彼女たちの話を聴く心の余裕はありませんでした。

祈りの答えは「勇気」だった

札幌ステーク部旭川第2ワード部
今野明美

3年前のことです。9月に宣教師に声をかけられ、家庭集會も何度も回を重ねて、バプテスマを受けるかどうか、真剣に考えなければならなくなっていました。宣教師たちの「私たちは神様が生きていらっしゃることを知っています」と言う言葉に、うそはないと思うものの、モロナイの約束を信じて毎日お祈りしても、答えを得



今野ご家族

だれにも本音を話すことができず、精神的な浮き沈みを繰り返す毎日だったのです。

でもそんな私を彼女たちは否定しませんでした。そのことを考えると今でも涙が出ます。私の文句や愚痴を黙って聞き、笑みを絶やさず、私のために断食までしてくれました。そして「愛してるよ」と言ってくれました。彼女たちの言葉は神様のメッセージであり、私を抱き締めてくれる手はイエス様の手でした。その手に私は今でも守られています。彼女たちが行かないと証によって教えてくれたものは知識より大きく、今の私の信仰を支えています。

愛は広がること、宣教師から私たちに贈られた愛がこれから多くの人に伝わってその心を満たし続けていくことを、私は確かに知っています。(やじま・ゆか 歓迎委員)

ることができず、熱心に教えてくれる宣教師に申し訳ない気がしていました。

そんなある日、家庭集會と一緒に参加してくれた姉妹と電話で話していて、「私、明日主人にバプテスマのことを言ってみる」と宣言してしまったのです。どうしてあんな思い切ったことを言ってしまったのかと、電話を切った後悔やみましました。というのも、主人は教会の話をするとても不愉快な顔をするし、前に教会の行事に誘ったときも、いつもの温厚な彼にしては珍しくひどく怒ったので、それからは教会のことをなるべく話さないようにしていたからです。「あの夫にバプテスマを受けたいなんて言えるだろうか。でも約束して主人に言わなかったなら、私はうそをつくことになる。」そう思うと心がどんどん重くなっていきました。そのとき、その姉妹が以前とても困ったときに、暇さえあれば祈っていた、と言っていたのを思い出し、私もとにかく神様に必死で祈ってみようと思いました。

翌日から私は早速どこにいても心の中で「神様どうか主人に私のバプテスマのことを話すことができるようお願いします」と祈り始めました。主人

が会社に行った後子供を連れて病院に行くのと、病院の前で宣教師がちらしを配っているのを見かけました。その日は土曜日だったので、午後、会社から帰宅した主人に子供を預けて、美容院に行きました。すると美容院のすぐそばで、また宣教師が歩いている人に声をかけているのを目にしました。帰りにバス停でバスを待っていると、再び姉妹宣教師がやって来てバスを待っている人たちに声をかけ始めたのです。「こんにちは。私は熊本から来ました。教会についてお話ししています。」「私は沖縄から来ました。」宣教師が声をかけても、話を聞く人はほとんどいませんでした。

「彼女たちはまだ若いのに、見ず知らずの人に話しかけるのは、どんなに勇気があることだろう。」こう考えたとき、はっと気がつきました。「そうだ。この勇気だ。この勇気こそ、朝から祈り求めていた答えなんだ。神様は宣教師たちを通してその勇気を見せてくださったのだ。彼らの困難や努力に比べたら、私なんて自分の夫に話すだけじゃないか。」そう考えると、病院でも美容院でもずっと祈っていた私の祈りを、神様は確かに聞いてくださっていたのだ、と喜びでいっぱいになりました。それまで雲の上の存在でしかなかった神様が少し身近に感じられ、全知全能であられることもなんとなく理解できたような気がして、このお方に従いバプテスマを受けよう、と心から強く決心しました。

それでも家に帰って主人の顔を見ると、やはりなかなか言い出せません。結局やっと次の日の朝「私、バプテスマを受けたいの」と言うことができました。主人はあきれたような表情で、「勝手にしなさい。でも家族には迷惑をかけないように」と言いました。私は急いで教会に行き、バプテスマを受けることを告げたのでした。

こうしたいきさつがあったので、主人が改宗するのはとても無理だと思っていました。けれども私がバプテスマを受けて半年ぐらいたったころ、どうしても夫にも改宗してもらいたいと思うようになりました。そこで毎朝毎晩「主人が福音を聞いてくれますように」

と熱心に祈り、毎週断食をしました。祈りには力があり、神様には不可能なことはないと感じていたからです。

断食していたある日の夜、いつものように寝る前に「主人が教会に興味を持ち、福音を聞いてくれますように」と祈っていると、とても強い感じを受けました。もう一度祈ると、また同じように感じます。勇気を出して主人に、「ねえ、宣教師から教会のことを聞いてみない」と言ってみました。主人は驚いた顔をするばかりです。重ねて聞いても「いやだ」という返事です。さっき感じたものは気のせいかと思ひ、その日はあきらめて寝ました。翌日真っ先に主人のことを祈ると、また前日と同じ感じがします。前日一度断わられているので臆病になっていましたが、きっと神様が助けてくださると思ひ直し、もう一度「福音を聞いてみない」と聞きました。やはり「いやだ」と強い口調で言われ、もうこれが最後と思ひ、「話を聞くのが嫌なら、宣教師を食事に招待してもいい」と聞くと、しぶしぶ「いいよ」と答えました。夫は結局、2回目の食事のときに福音を聞く約束をして、4カ月後にバプテスマを受けたのでした。

夫の気持ちが変わるうえで、当時2歳だった息子も大きな役割を果たしていました。いつごろからか息子は夜寝る前に、日曜日の託児クラスで習った『神の子です』（賛美歌189番）を歌ってお祈りをするようになり、主人もそれを聞いて心を打たれたようでした。そのうち主人も歌を覚えて、3人で歌ったこともあり。1991年3月、私たち家族は神殿で結び固めの儀式を受けました。3年前宣教師に声をかけられたときには、想像もできなかったことです。

神様は考えもつかない方法で私たちを助け導いてくださいます。私はいくつかの経験を通して、祈り、特に断食を伴う祈りを神様は聞いてくださっているとの強い証を得ました。神様が本当に生きて、私たち一人一人を愛してくださっており、福音によって人は変わること心から証します。(いまの・あけみ ステーキ部初等協会管理会員)

思いがけない 祈りの答え

元大阪伝道部専任宣教師
ジャニス・S・クーバー

盲人として生まれてきたことは、伊藤清兄弟にとって、教会に活発に集い、音楽の才能を分かち合う妨げにはなりません。大阪府豊中市の岡町ワード部に所属する伊藤兄弟は、40年前の、まだ教会員でなかった15歳のころから、日曜学校やMIAの活動、宣教師が催す様々な集会でピアノを弾いてきました。

しかし、教会に入って30年ほど過ぎたころ、伊藤兄弟はさらに強い信仰を持ちたいと願うようになりました。それからというものの数年間にわたって、その願いがかなうよう祈り続けました。祈りの答えは思いがけない形でもたらされました。伊藤兄弟にバプテスマを施した宣教師と、去年、再会したのです。その宣教師とは私の夫、シェリル・D・クーバー長老でした。夫と私は、昨年、専任宣教師として日本に赴任してきました。そして1991年8月、故郷のユタ州ケイズビルに帰ることになっています。

伊藤兄弟はクーバー長老に次のように話しました。「私はこの10年間、福音の中であってさらに信仰を深め、新しく生まれ変わり、強められるようにと祈り続けてきました。クーバー長老が日本に戻ってきてくれたことで私のこの祈りはかなえられました。日本に

また戻って来てくださり、しかも奥さんにもお会いできて、本当に感謝しています。あなた方は、まさに私のこれまでの祈りに対する答えです。」

伊藤兄弟は、若いころ伝道に出たいと思っていましたが、この望みはかなっていませんでした。しかしそれであきらめてしまわず、妻の好姉妹と共に会員伝道を行なってきました。ふたりは長年にわたって、日本中の教会でピアノコンサート形式のファイヤサイドを開き、福音を広げてきました。音楽と証を通して、イエス・キリストの福音がもたらす希望を宣べ伝えてきたのです。

「私にバプテスマを施してくれたのは、長老がこれまでしたことの中で最高のことですよ。」1990年3月24日、伊藤兄弟の40回目のバプテスマ記念日を共に祝った際、伊藤兄弟はクーバー長老にそう語りました。

当時、宣教師が携えてきた教えは、目の見えないこの日本人少年に、より良い生活に対する希望を現世だけでなく永遠にわたってもたらしました。伊藤兄弟は当時を回想して次のように話してくれました。「宣教師たちが『神様はご自分のすべての子供たちを愛しておられます』と話すのを聞いて、『だとしたら神は、目の見えない私でさえも愛してくださっているかもしれない』と思いました。」

伊藤兄弟は、自分にもいつか共に聖典を学び、祈ることのできる家族が持てるだろうかと心配していました。しかし、ステーキ部大会で中島好姉妹と出会い、やがて結婚し、ふたりの子供に恵まれました。その子供たちも福音に対する強い証を持っています。

現在、伊藤兄弟はワード部オルガニストとして責任を果たしており、伊藤姉妹はご主人が弾く楽譜を点訳しています。また、伊藤兄弟は、新しい賛美歌集に掲載されているすべての曲を練習し、暗譜しています。(「チャーチニュース」1991年8月24日付)

左からジャニス・S・クーバー姉妹、シェリル・D・クーバー長老、伊藤清兄弟、伊藤好姉妹。



3月に召された専任宣教師 第153期生 14人



後列左から1-7, 前列左から8-14

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 佐藤 秀樹	仙台 S/山形 W	札幌伝道部
2. 坂本 欣也	東京北 S/浦和 W	仙台伝道部
3. 中野 学	東京南 S/渋谷 W	沖縄伝道部
4. 中田 清勝	札幌西 S/新琴似 W	仙台伝道部
5. 横山 昇	東京北 S/中野 W	神戸伝道部
6. 徳沢 康	北陸 D/金沢 B	大阪伝道部
7. 堀 浩一	秋田 D/鶴岡 B	岡山伝道部
8. 阿部 光	札幌 S/岩見沢 B	仙台伝道部
9. 加土 さおり	神戸 S/神戸 W	仙台伝道部
10. 小玉 まり子	札幌 S/豊平 W	岡山伝道部
11. 岡本 和子	大阪堺 S/羽曳野 W	名古屋伝道部
12. 今野 亜紀子	札幌西 S/藻岩 W	大阪伝道部
13. 根本 弥生	東京東 S/北千住 B	仙台伝道部
14. 笠 裕美	横浜 S/上大岡 W	仙台伝道部

S:ステークス部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

役員の内命

1992年2月15日から3月17日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の内命(敬称略)

- 名古屋伝道部三重地方部
新地方部長: 除村秀輝
(前任者: 作野研一)
- 仙台ステークス部青葉ワード部
新監督: 斉藤博昭
(前任者: 菅原誠一郎)
- 仙台ステークス部長町ワード部
新監督: 岩佐敏之
(前任者: 中野浩二)
- 東京北ステークス部川越ワード部
新監督: 上村星輝
(前任者: 高山秀二)
- 東京東ステークス部つくばワード部
新監督: 佐藤雄司
(前任者: 重松征史)
- 東京北伝道部長野地方部長野支部
新支部長: 高瀬満
(前任者: 松橋春海)
- 東京北伝道部長野地方部松本支部
新支部長: 杉本一芳
(前任者: 望月孝夫)
- 神戸伝道部福知山地方部洲本支部
新支部長: 中沢悟
(前任者: 田中健児)
- 福岡伝道部熊本地方部諫早支部
新支部長: 宮川尚孝
(前任者: 村里政則)

お知らせ

ブックセンターから 新刊のお知らせ

- 「愛の働き」
VHS ビデオカセット
ITEM 53060 300 25分1,200円



伝道を終え帰還する宣教師が、福音を分かち合い、奉仕によって人々に愛を示した様々な経験を、飛行機の中で隣り合わせた男性に物語る構成になっています。宣教師とはどのようなものであり、どのようなことをするのか、具体的な働きから紹介しています。若人に宣教師となる備えをさせるためにも格好の教材です。

3月に召された専任宣教師 第153期生 14人



後列左から1-7, 前列左から8-14

名前	出身地	伝道地
1. 佐藤 秀樹	仙台 S / 山形 W	札幌 伝道部
2. 坂本 欣也	東京北 S / 浦和 W	仙台 伝道部
3. 中野 学	東京南 S / 渋谷 W	沖縄 伝道部
4. 中田 清勝	札幌西 S / 新琴似 W	仙台 伝道部
5. 横山 昇	東京北 S / 中野 W	神戸 伝道部
6. 徳沢 康	北陸 D / 金沢 B	大阪 伝道部
7. 堀 浩一	秋田 D / 鶴岡 B	岡山 伝道部
8. 阿部 光	札幌 S / 岩見沢 B	仙台 伝道部
9. 加土 さおり	神戸 S / 神戸 W	仙台 伝道部
10. 小玉 まり子	札幌 S / 豊平 W	岡山 伝道部
11. 岡本 和子	大阪堺 S / 羽曳野 W	名古屋 伝道部
12. 今野 亜紀子	札幌西 S / 藻岩 W	大阪 伝道部
13. 根本 弥生	東京東 S / 北千住 B	仙台 伝道部
14. 笠 裕美	横浜 S / 上大岡 W	仙台 伝道部

S:ステーク部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

役員の任命

1992年2月15日から3月17日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の異動(敬称略)

- 名古屋伝道部三重地方部
新地方部長: 除村秀輝
(前任者: 作野研一)
- 仙台ステーク部青葉ワード部
新監督: 齊藤博昭
(前任者: 菅原誠一郎)
- 仙台ステーク部長町ワード部
新監督: 岩佐敏之
(前任者: 中野浩二)
- 東京北ステーク部川越ワード部
新監督: 上村星輝
(前任者: 高山秀二)
- 東京東ステーク部つくばワード部
新監督: 佐藤雄司
(前任者: 重松征史)
- 東京北伝道部長野地方部長野支部
新支部長: 高瀬満
(前任者: 松橋春海)
- 東京北伝道部長野地方部松本支部
新支部長: 杉本一芳
(前任者: 望月孝夫)
- 神戸伝道部福知山地方部洲本支部
新支部長: 中沢悟
(前任者: 田中健児)
- 福岡伝道部熊本地方部諫早支部
新支部長: 宮川尚孝
(前任者: 村里政則)

お知らせ

ブックセンターから 新刊のお知らせ

- 「愛の働き」
VHS ビデオカセット
ITEM 53060 300 25分1,200円



伝道を終え帰還する宣教師が、福音を分かち合い、奉仕によって人々に愛を示した様々な経験を、飛行機の中で隣り合わせた男性に物語る構成になっています。宣教師とはどのようなものであり、どのようなことをするのか、具体的な働きから紹介しています。若人に宣教師となる備えをさせるためにも格好の教材です。